

梶山女学園大学・大学院 F D 活動報告書
(2020年度)

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第8号 (通巻 第21号)

2020年度

梶山女学園大学・大学院FD活動報告書

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第8号（通巻第21号）

相山女学園大学・大学院 FD 活動報告書 (2020 年度)

目 次

1	はじめに	全学FD 委員会委員長・大学院FD 委員会委員長 長澤 唯史
2	全学FD 活動報告	
2-1	全学FD 委員会記録	2
2-2	授業アンケート	4
2-3	各種研修等	13
3	学部FD 活動報告	
3-1	生活科学部	16
3-2	国際コミュニケーション学部	18
3-3	人間関係学部	26
3-4	文化情報学部	28
3-5	現代マネジメント学部	29
3-6	教育学部	31
3-7	看護学部	35
4	大学院FD 活動報告	
4-1	大学院FD 委員会記録	40
4-2	大学院授業アンケート	41
5	研究科FD 活動報告	
5-1	生活科学研究科	46
5-2	人間関係学研究科	48
5-3	現代マネジメント研究科	50
5-4	教育学研究科	51
6	FD 委員会名簿	

1 はじめに

はじめに

相山女学園大学全学FD委員会委員長
相山女学園大学大学院FD委員会委員長
長 澤 唯 史

相山女学園大学および相山女学院大学大学院で2020年度に行われたFD活動についての報告書がまとまりましたので、ここにお届けいたします。

言うまでもありませんが、この1年は新型コロナウイルス感染症対策に、本学のみならず日本中、いや世界中の教育機関が翻弄されました。対面授業から遠隔授業への切り替えの準備、授業開始後のさまざまな不具合への対応、システムに不慣れな教員や学生へのサポート、その他、予測を超えた突発的な事態も次々と起こり、各学部の教員も教務課をはじめとする職員も、その混乱を乗り切るために一丸となって取り組んできました。その中で改めてFDのあり方を見直すためのきっかけも出来たのではないかと思います。

具体的には、FD研修会などで、より主体的な活動のあり方を模索することになりました。年度初めの遠隔授業講習会や、9月の全学FD研修会でのグループワークなど、一人ひとりの参加者がこれまで以上に当事者意識を持ち、具体的な課題に取り組むことができたのではないのでしょうか。また教職員間の情報共有や現場へのフィードバックにもより積極的に行われ、その直接的な成果も感じられたのではないかと思います。

授業アンケートについても、遠隔授業のなかでどのような形を取りうるかを検討し、結果的にインターネット上でのアンケート収集へと全面的に移行することとなりました。初年度はやはり教員も学生も不慣れなこともあり、実施率・回収率ともに（とくに後期は）大幅に落ち込みました。その結果として回収率の向上や質問項目の検討など、さまざまな課題が新たに浮上してきましたが、従来のやり方を惰性的に踏襲するのではなく、改めてそのあり方や方法などを見直す良い機会になりました。この一年間のコロナ対応が奇貨となって、FD活動の新たな展開も視野に入ってきたのではないかと考えています。

昨年度は本学の認証評価の年でもありました。その中で大きなポイントとなったのが、教育の質保証でした。今回の認証評価では大学全体の質保証が重点的に問われましたが、今後は学部から各教員、さらには個々の授業での質保証へと力点が移動してくることは間違いありません。また認証評価報告書の中で指摘された問題として、学生の学習成果の可視化があります。こうした課題もすべてFD活動に直接影響するもの、あるいはFDの中で取り組んでいくべきものでしょう。今後はさらにFD活動の活発化と実質化に全学で取り組んでいくことをめざします。そのためにも教職員のみなさまのご理解とご協力をさらに賜いますよう、お願いいたします。

2 全学FD活動報告

- 2－1 全学FD委員会記録
- 2－2 授業アンケート
- 2－3 各種研修等

(第1回) 2020(令和2)年 4月28日(火) ～5月7日(木) メール会議	1 報告 (1) 2019年度後期授業アンケート結果について (2) 「今年度の振り返り」と「来年度の目標」のアンケート(2019年度)について (3) その他 2 議題 (1) 2020年度FD活動に関する件 ①2020年度FD活動計画(案)に関する件 ②2020年度全学FD委員会予算に関する件 ③授業アンケートに関する件 ④新任教員研修に関する件 ⑤FD研修会に関する件 (2) その他
(第2回) 2020(令和2)年 5月26日(火) ～6月1日(月) メール会議	1 報告 (1) 2020年度前期学生FDスタッフ申請について (2) 令和2年度「私情協 教育イノベーション大会」発表者募集等について (3) その他 2 議題 (1) 2020年度前期授業アンケートに関する件 (2) 2020年度後期学生FDスタッフ募集要項に関する件 (3) 2020年度FD研修会に関する件 (4) その他
(第3回) 2020(令和2)年 6月23日(火) 17:00～18:20	1 報告 (1) 2020年度学部FD活動計画について(依頼) (2) 他大学等のFD研修会等案内について (3) 2020年度前期授業アンケートについて (4) その他 2 議題 (1) 2020年度FD研修会に関する件 (2) その他
(第4回) 2020(令和2)年 7月28日(火) 17:00～17:50	1 報告 (1) 2020年度後期学生FDスタッフ申請について (2) 2020年度学部FD活動について (3) 2020年度FD研修会について (4) 遠隔授業アンケートについて (5) その他 ①遠隔授業に関する課題等について 2 議題 (1) 2020年度授業アンケートリフレクションペーパーに関する件 (2) その他

(第 5 回) 2020 (令和 2) 年 9 月 22 日 (火) 17:00~18:15	1 報告 (1) 2020 年度 F D 研修会実施状況について (2) 2020 年度前期授業アンケート実施状況について (3) 遠隔授業アンケート実施状況について (4) その他 2 議題 (1) 2020 年度後期授業アンケートスケジュール・実施要領に関する件 (2) 2021 年度シラバスに関する件 (3) 令和 3 年度全学 F D 委員会予算に関する件 (4) その他
(第 6 回) 2020 (令和 2) 年 10 月 27 日 (火) ~11 月 2 日 (月) メール会議	1 報告 (1) 2020 年度後期授業アンケートについて (実施科目確認) (2) 令和 3 年度全学 F D 委員会予算について (一部修正報告) (3) 遠隔授業アンケート結果の公開について (4) その他
(第 7 回) 2020 (令和 2) 年 11 月 24 日 (火) 17:00~17:30	1 報告 (1) 相山女学園大学改革アクションプラン 2020 中間検証について (2) 電子著作物相互利用事業へのご参加及び相互利用システムのご利用について (3) その他 2 議題 (1) 2020 年度後期授業アンケートリフレクションに関する件 (2) 2020 年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標アンケート」に関する件 (3) 2020 年度 F D 活動報告書に関する件 (4) その他
(第 8 回) 2021 (令和 3) 年 1 月 26 日 (火) 17:00~17:50	1 報告 (1) 2020 年度 F D 推進費用執行状況について (2) 2021 年度新任教員研修計画について (3) その他 ①各種日程の確認について 2 議題 (1) 2021 年度学生 F D スタッフ募集に関する件 (2) 2020 年度 F D 活動の検証と 2021 年度の計画に関する件 (3) その他
(第 9 回) 2021 (令和 3) 年 3 月 23 日 (火) ~3 月 30 日 (火) メール会議	1 報告 (1) 2020 年度後期授業アンケート結果について (2) 2020 年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標」のアンケート結果について (3) その他

2-2

授業アンケート

【前期】

1. 実施概要

・実施期間：2020年8月3日（月）～ 8月14日（金）

・実施対象科目：

◎専任教員

2020年度前期開講の授業科目のうち、卒業研究、受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を2科目以上選択

◎非常勤教員

2020年度前期開講の授業科目のうち、集中講義など、実施期間・実施予備期間に授業を行わない科目を除いた全科目

・実施方法：Webによる

2. 実施科目数及び実施率

学 部	対 象 科目数	実 施 科目数	実施率	未実施 科目数
生 活 科 学 部	125	109	87.2%	16
国際コミュニケーション学部	182	150	82.4%	32
人 間 関 係 学 部	104	97	93.3%	7
文 化 情 報 学 部	108	79	73.1%	29
現代マネジメント学部	71	62	87.3%	9
教 育 学 部	150	127	83.6%	23
看 護 学 部	49	44	89.8%	5
計	789	668	84.7%	121

※「未実施科目数」＝回答率が0.0%の科目

※参考：2019年度前期授業アンケート実施率 97.5%（537/551科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は対象科目から外した。

3. 総合的充実度（設問12）回答

「設問12 総合的にみてこの授業は充実していた。」

学 部	そのとおりである	どちらかといえば そのとおりである	どちらかといえば そうではない	そうではない
生 活 科 学 部	54.7%	35.5%	8.0%	1.8%
国際コミュニケーション学部	68.1%	26.6%	4.2%	1.0%
人 間 関 係 学 部	67.4%	26.9%	4.8%	0.8%
文 化 情 報 学 部	58.5%	33.0%	6.3%	2.1%
現代マネジメント学部	53.5%	38.3%	6.0%	2.1%
教 育 学 部	67.3%	26.7%	4.9%	0.9%
看 護 学 部	58.5%	38.0%	2.5%	0.9%
大 学 全 体	61.1%	32.1%	5.2%	1.4%

4. リフレクション・ペーパーの提出状況

学部別提出率

学 部	アンケート 実施科目数	リフレクション・ペーパー 提出科目数	リフレクション・ペーパー 提出率
生 活 科 学 部	109	89	81.7%
国際コミュニケーション学部	150	114	76.0%
人 間 関 係 学 部	97	69	71.1%
文 化 情 報 学 部	79	64	81.0%
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	62	49	79.0%
教 育 学 部	127	107	84.3%
看 護 学 部	44	43	97.7%
全 学 部 (昨年度前期実績)	668 (824)	535 (636)	80.1% (77.2%)

10月末に集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

【後期】

1. 実施概要

・実施期間：2020年12月21日（月）～2021年1月19日（火）

・実施対象科目：

◎専任教員

2020年度前期開講の授業科目のうち、卒業研究、受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を2科目以上選択

◎非常勤教員

2020年度前期開講の授業科目のうち、集中講義など、実施期間・実施予備期間に授業を行わない科目を除いた全科目

・実施方法：Webによる

2. 実施科目数及び実施率

学 部	対 象 科目数	実 施 科目数	実施率	未実施 科目数
生 活 科 学 部	171	133	77.8%	38
国際コミュニケーション学部	173	143	82.7%	30
人 間 関 係 学 部	112	91	81.3%	21
文 化 情 報 学 部	126	90	71.4%	36
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	93	56	60.2%	37
教 育 学 部	149	118	79.2%	31
看 護 学 部	38	31	81.6%	7
計	862	662	76.8%	200

※「未実施科目数」＝回答率が0.0%の科目

※参考：2019年度後期授業アンケート実施率（アンケート用紙で実施）97.8%（794/812科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は、対象科目から外した。

3. 総合的充実度（設問12）回答

「設問12 総合的にみてこの授業は充実していた。」

学 部	そのとおりである	どちらかといえば そのとおりである	どちらかといえば そうではない	そうではない
生 活 科 学 部	56.0%	37.6%	4.6%	0.8%
国際コミュニケーション学部	69.0%	24.7%	3.4%	1.8%
人 間 関 係 学 部	65.3%	27.2%	4.1%	1.9%
文 化 情 報 学 部	63.1%	29.9%	5.0%	0.9%
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	59.0%	33.8%	4.6%	2.1%
教 育 学 部	62.4%	30.3%	4.8%	1.0%
看 護 学 部	60.4%	32.3%	5.3%	1.6%
大 学 全 体	62.2%	30.8%	4.5%	1.4%

4. リフレクション・ペーパーの提出状況

学部別提出率

学 部	アンケート 実施科目数	リフレクション・ペーパー 提出科目数	リフレクション・ペーパー 提出率
生 活 科 学 部	133	115	85.0%
国際コミュニケーション学部	143	106	72.0%
人 間 関 係 学 部	91	65	69.2%
文 化 情 報 学 部	90	68	75.6%
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	56	42	75.0%
教 育 学 部	118	100	84.7%
看 護 学 部	31	25	80.6%
全 学 部 (昨年度前期実績)	662 (794)	514 (618)	77.6% (77.8%)

3 月末に集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

2020年度授業アンケート（前期）結果

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用する。

2. 実施時期

実施期間：2020年8月3日（月）～8月14日（金）

3. 実施方法

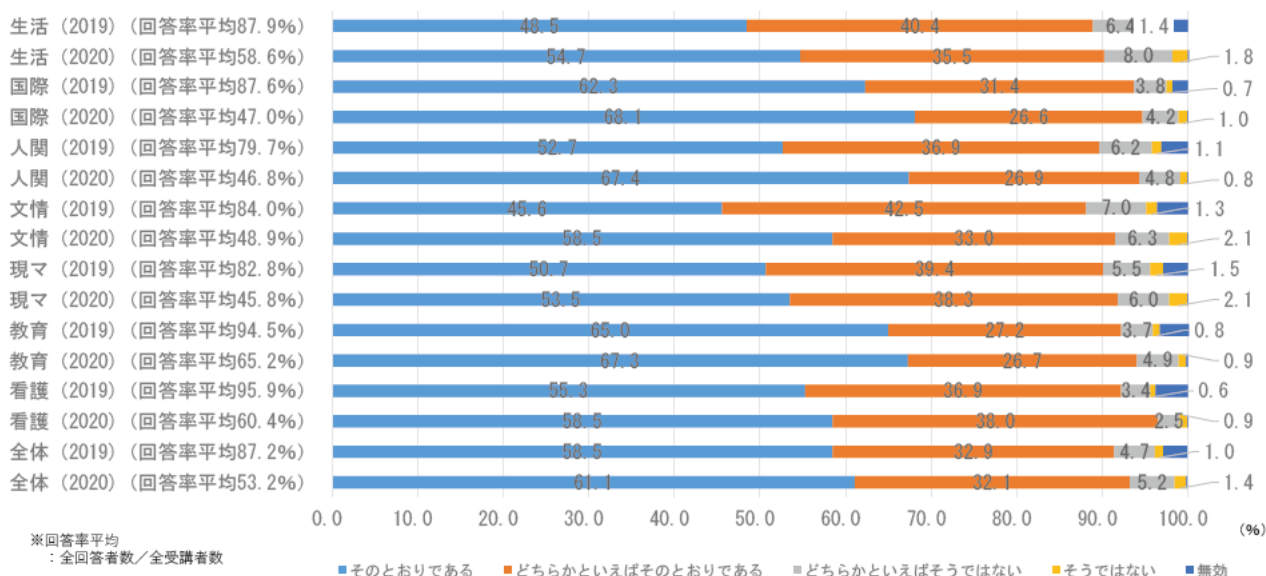
Webによる

4. 実施科目数

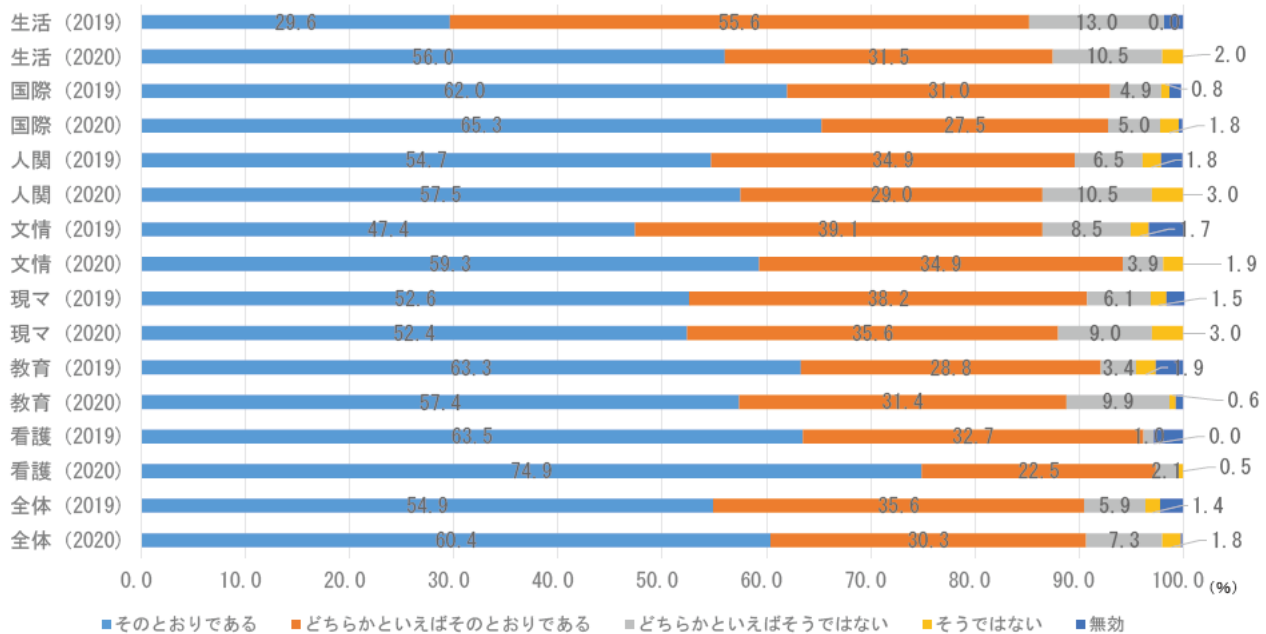
	2019年度前期 (アンケート用紙による)	2020年度前期 (Webによる)
生活科学部	152	109
国際コミュニケーション学部	174	150
人間関係学部	112	97
文化情報学部	126	79
現代マネジメント学部	76	62
教育学部	119	127
看護学部	65	44
大学全体	824	668

集計・分析結果

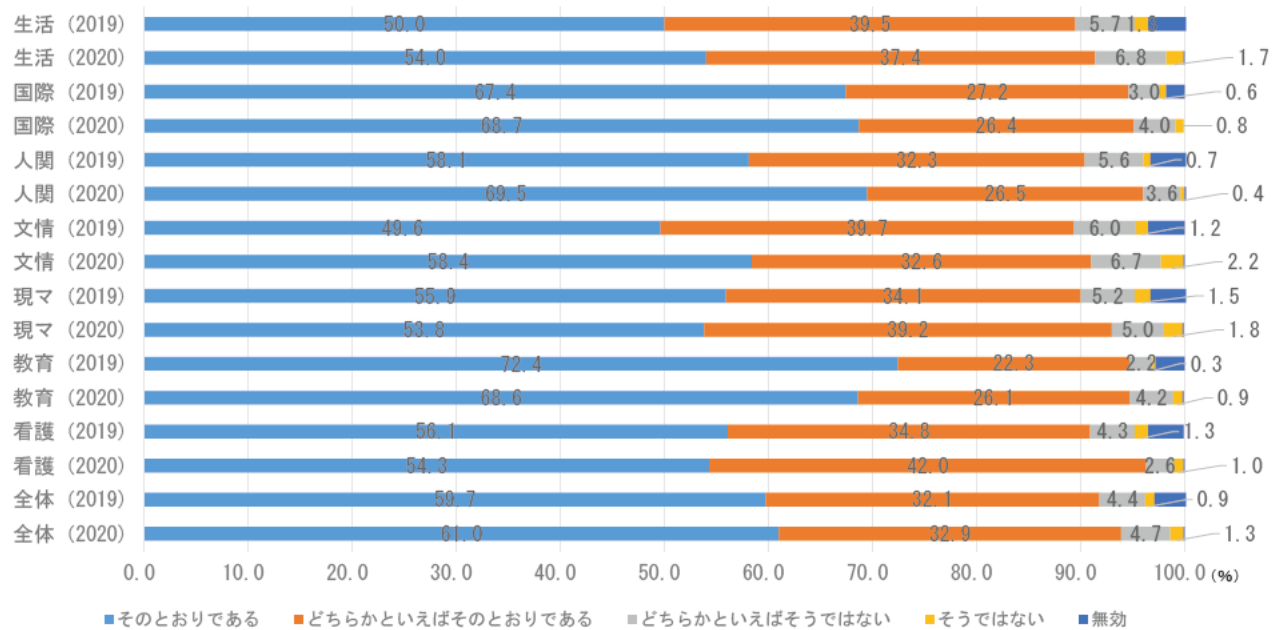
総合充実度（全体）



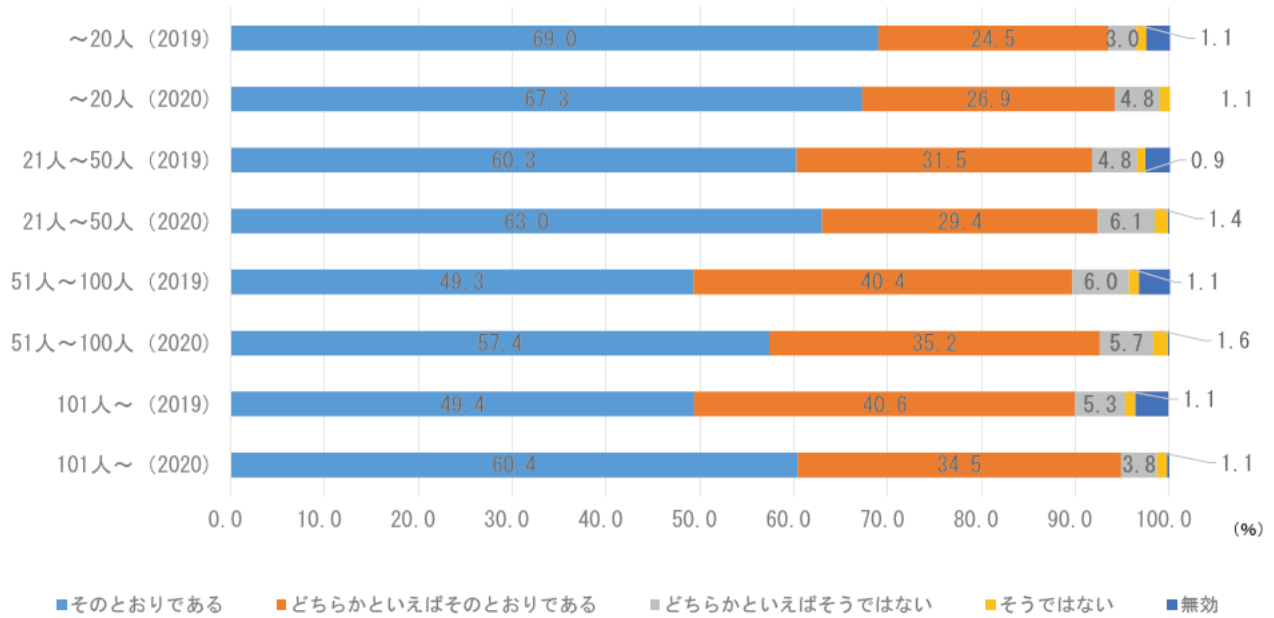
総合充実度（教養）



総合充実度（専門）



総合充実度（受講者数別）



2020年度授業アンケート（後期）結果

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用する。

2. 実施時期

実施期間：2020年12月21日（月）～2021年1月19日（火）

3. 実施方法

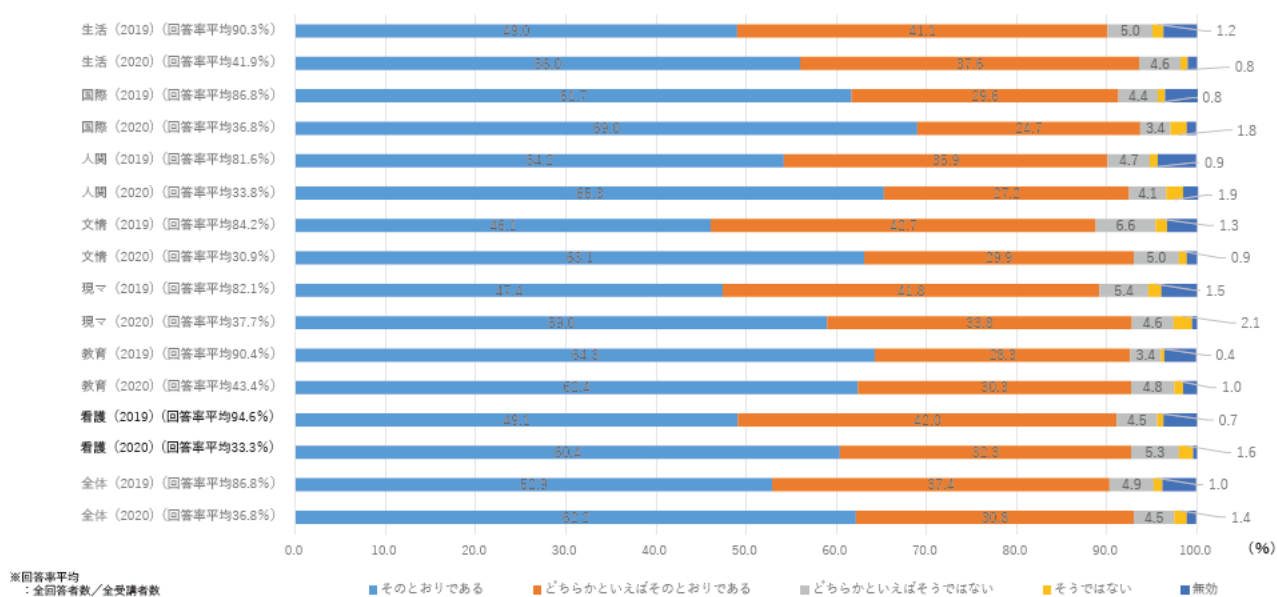
Webによる

4. 実施科目数

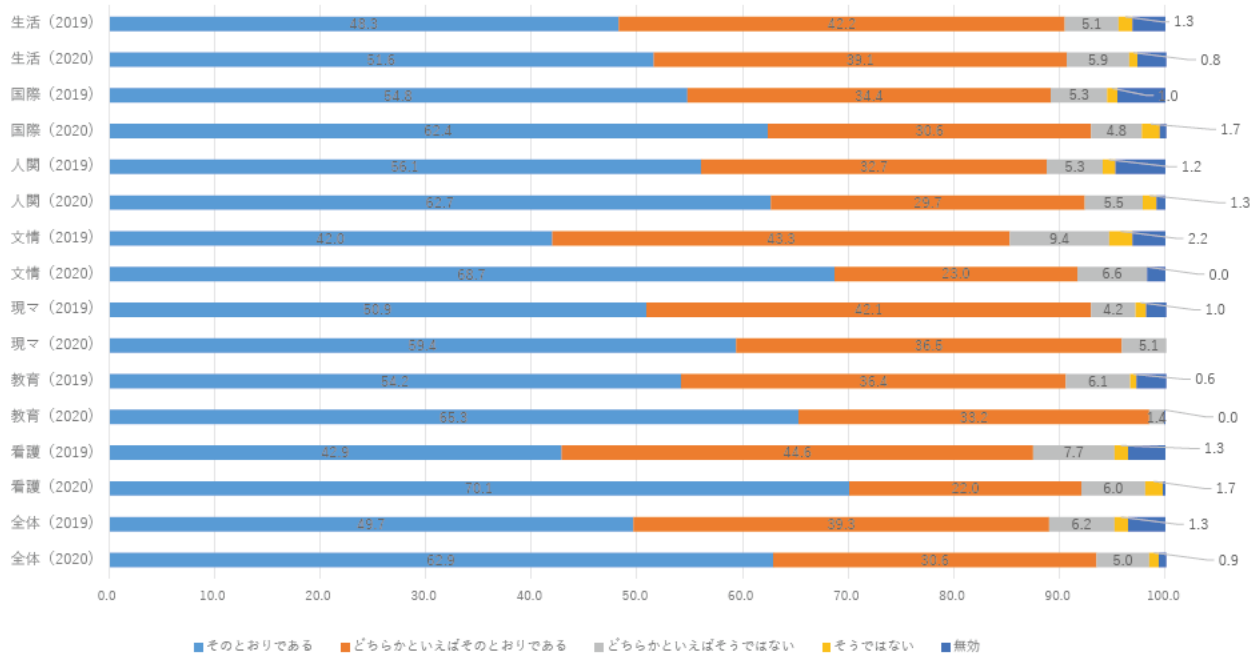
	2019年度後期 (アンケート用紙による)	2020年度後期 (Webによる)
生活科学部	158	133
国際コミュニケーション学部	170	143
人間関係学部	107	91
文化情報学部	119	90
現代マネジメント学部	87	56
教育学部	125	118
看護学部	46	31
大学全体	812	662

集計・分析結果

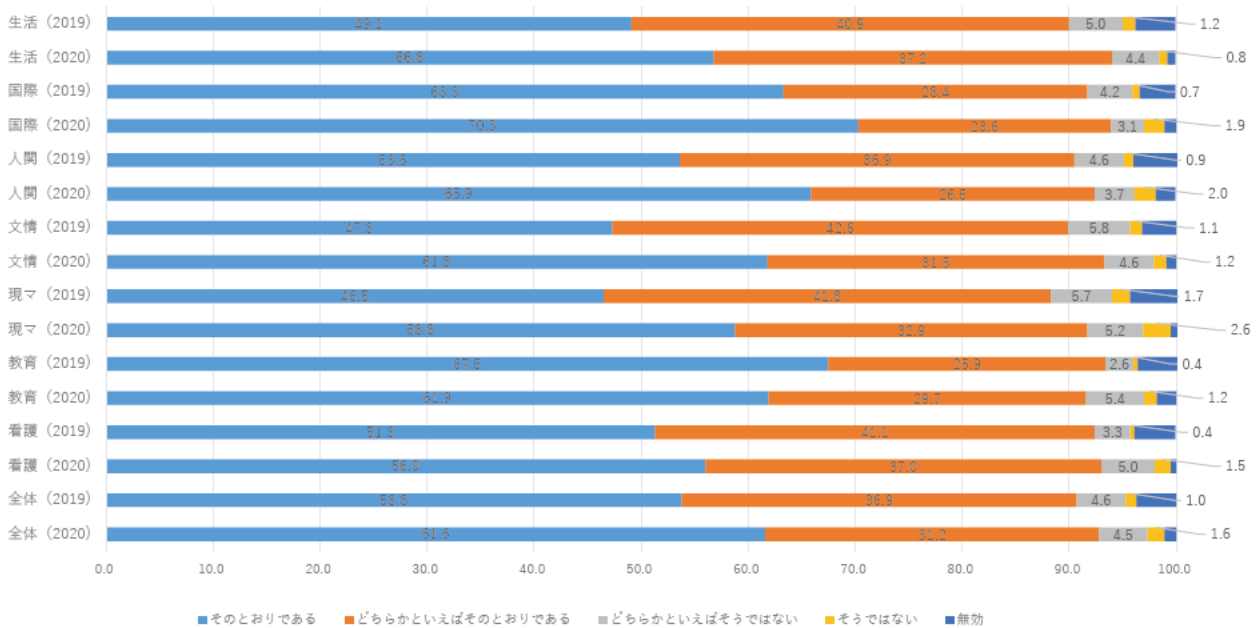
総合充実度（全体）



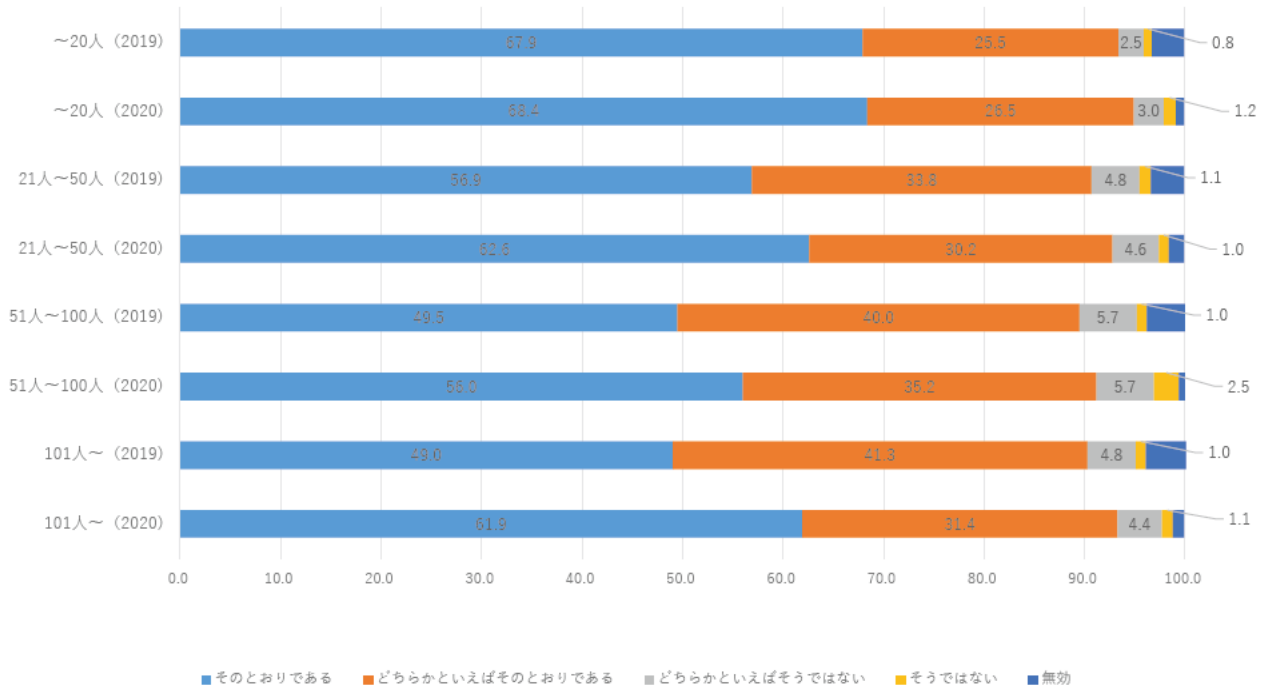
総合充実度（教養）



総合充実度（専門）



総合充実度（受講者数別）



1. 遠隔授業に関する勉強会・意見交換会

- ・日時：2020年4月17日（金） 13：30～15：30
- ・場所：Zoomでのオンライン開催
- ・内容・講師：
 - ①各種遠隔授業に関する情報提供
 - ・リアルタイム双方向授業 向 直人 准教授（文化情報学部）
 - ・簡単なオンデマンド遠隔授業の方法 木田勇輔 准教授（文化情報学部）
 - ・スタジオ録画によるオンデマンド遠隔授業 柊窪優二 教授（文化情報学部）
 - ・補足説明 黒田由彦 教授（文化情報学部長）
 - ②質疑応答・意見交換

2. FD研修会

- ・日時：2020年9月10日（木） 13：30～15：00
- ・場所：Zoomでのオンライン開催
- ・テーマ：遠隔授業についての検証と課題
- ・内容・講師：
 - ①発表 向 直人 准教授（文化情報学部）
木田勇輔 准教授（文化情報学部）
※両講師とも遠隔授業対策チーム（2020年4月20日発足）メンバー
 - ②グループワーク（Zoomブレイクアウトルーム）
- ・参加者数：

生	国	人	情	現	教	看	合計
32名 (78.0%)	24名 (85.7%)	31名 (93.9%)	24名 (88.9%)	21名 (91.3%)	20名 (71.4%)	25名 (55.6%)	177名 (80.7%)

※その他事務職員等20名、合計197名

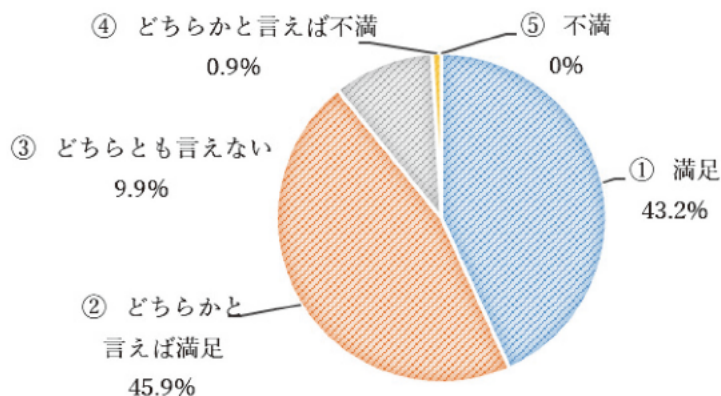
（参考：2019年度実績）

生	国	人	情	現	教	看	合計
33名 (78.6%)	18名 (66.7%)	28名 (87.5%)	17名 (63.0%)	14名 (73.7%)	16名 (57.1%)	33名 (73.3%)	159名 (72.3%)

《アンケート集計結果》

Q. 今回の研修会について全体としての満足度をお答えください。

①満足	②どちらかと言えは満足	③どちらとも言えない	④どちらかと言えは不満	⑤不満	⑥回答なし
48	51	11	1	0	0



3 学部FD活動報告

- 3－1 生活科学部
- 3－2 国際コミュニケーション学部
- 3－3 人間関係学部
- 3－4 文化情報学部
- 3－5 現代マネジメント学部
- 3－6 教育学部
- 3－7 看護学部

生活科学部FD委員会委員

(管理栄養学科) 三田有紀子、小多沙知

(生活環境デザイン学科) 川野紀江、橋本令子

(学部長・オブザーバー) 藏澄美仁

【1】活動計画（目標）

- ①積極的な提案や活動が生まれるよう、FD活動の広報を工夫すること。また、学部のFD活動を推進するために、学部教職員からの提案を積極的に募ること。
- ②全学実施の授業アンケートの参加率を高め、その回答を有効に利用すること。
- ③予定されている学科行事をつつがなく実行すること。

【2】実施報告

①委員会の開催

委員会は2020年4月～2021年3月の間適宜メール会議を実施した。協議事項については、FD委員会あるいは各学科会議・教授会にてそれぞれ臨機応変な手段で協議・決定した。

<協議事項>

- ・授業アンケートは、COVID-19によりwebで実施することを確認。
- ・学部FD研修を実施することを確認。
- ・例年と同様に、卒業時アンケートを実施することを確認。
- ・学部FD委員会のウェブサイトの運営についての意見交換。

②学部FD委員会ウェブサイト

学部FD委員会ウェブサイトについて、更新や今後の取扱いなどを議論した。現在の状況を鑑み、次年度から廃止を含めて検討することとなった。

③購入した書籍

FD活動に予算が割り当てられなかったために該当する執行はなかった。

④2020年度に企画・実施されたFD活動

2020年7月 授業アンケート実施（全学）

2020年9月 FD研修会（全学）

2021年1月 授業アンケート実施（全学）

2021年2-3月 「今年度の振り返り」と「来年度の目標アンケート」の実施（全学）

2021年3月 学部FD研修会（学部）

2021年3月 卒業時アンケートの実施（生活環境デザイン学科）

【3】課題点

- ・目標①については、学生に実施した授業アンケートの実施率が前期87.2%、後期77.8%となり、昨年度の実施率と比べて低下がみられた。これは全学的なものだが、紙媒体からwebでの実施に切り替えたこと、実施に際し学生への伝達ミスなどが挙げられ、今後の対応を検討する必要がある。また、リフレクションペーパーの提出状況は比較的提出率が高い数値となった。このことから、教職員から学生向けのFD活動は一定の評価ができていると考えられる。今年度は授業形態やスケジュールなどの大きな変更が生じたため、FD活動の推進が難しい状況でもあった。次年度は、今年度の経験を踏まえて、FD活動の意義を説明したうえで、新しい方法を取り入れるなどの積極的な提案や活動が生まれるよう努めたい。

- ・目標②については、FD研修などへの参加の呼びかけを行った。9月に実施したFD研修会の出席率は78.0%と全学80.7%をやや下回る結果であった。約20%増加した昨年度ともほぼ同様の参加率であり、今後も参加の呼びかけが必要である。昨年度に引き続き学部にはFD活動のための予算がないが、その中でもできる活動の検討を今後も重ね、充実するように努める。
- ・目標③については、例年通り予定通り実施するに至った。また、授業における学生FDスタッフの活用では、他学部と同様、COVID-19による授業内容の変更等を理由に応募がなくなった。しかし、このような活動は現在十分に活用されておらず、学部への広報活動をするとともに運用方法等を検討する必要がある。

【4】次年度へ向けた計画

今年はCOVID-19に大きく影響された1年となった。令和2年度に元々掲げていた目標は概ね達成されたものの、形式が大きく変化しており、今後は新しい様式を含めてFD活動を積極的に推進していく必要がある。その方法としては、例年と同じように①FD研修会（全学）のような参加型のFD活動に対して学部教員の参加を促すこと、②FD活動の活性化を促すために積極的な提案やそのためのアナウンスの仕方を工夫すること、③FD活動の実施報告が増えるよう、学部の協力のもと様々な活動を実現するなどが挙げられる。状況が変化していく中でこの活動を推進するためには、既存の学部FD活動に今年度のような新しい形式を含めた現状をより詳細に分析し、内容の精査を図る必要も出てくるかもしれない。

「授業アンケート」において、今年度も総合充実度は両学科とも肯定的意見が90%ほどと高値であるが、現状を踏まえると今後も教員の個人あるいはグループレベルでの更なる改良を試みることが求められる。したがって、これらの結果を有効に活用し、教員個々の研鑽と同時にその成果をどのように授業に反映させるか、学生FDスタッフの活用など様々な方向から次年度も検討していきたいと考える。

今年度は卒業時アンケートを実施することができ、例年と同じく得られる結果はさらなる授業改善の材料となると考えられる。今後は、その卒業時アンケートの実施内容について引き続き検討することが必要であろう。

はじめに

2020年度、新型コロナウイルス感染症〔COVID-19〕によるパンデミックにより、全国的に、否、全世界的にこれまでのような社会生活が営めない状況となった。このコロナ禍は教育の現場にも大きな影を落とした。特に大学生は、小学生・中学生・高校生と比べ、行動範囲が広いと、感染リスクが高く、また感染しても若年層は症状が現れないこともあり、本人が意識せぬままに他者に感染を広げてしまうリスクも高いことから、小学校・中学校・高等学校で対面授業が再開されてからも、大学では遠隔で授業を行うことが求められた（e.g., 毎日新聞, 2020a; 毎日新聞, 2020b; 高橋, 2020; 読売新聞オンライン, 2020aなど）。そのため、大学ではZoomやMS Teams、Google Meet等を使い、ウェブカメラを通じての「双方向通信型の授業」や、あらかじめ教員が授業動画を作成し、それを学生たちが、適宜、都合の良い時に視聴する「オンデマンド型の授業」、その両方を組み合わせた形での授業、また実習/実験など、対面でなければ行えない授業の場合は、感染対策を十分に施した上で対面授業を行うなど、授業内容と授業の種類に応じて、さまざまな形態での授業が試行錯誤されていた。

2020年度は、こうした社会的状況により、PCやタブレット等をはじめとする、いわゆるデジタル・デバイスに頼らなければ授業が実施できない、新たな時代（新たな日常）を経験することになった。しかし、これは教育現場のみならず、日本社会のさまざまな場面で、こうした現実が突きつけられ、同時に日本が他国に比べ、社会のデジタル化に大きく後れをとっていたことを実感させられる年度でもあった（e.g., 中部経済新聞, 2021; 読売新聞オンライン, 2021; 時事ドットコムニュース, 2020; 日本経済新聞, 2020a; 日本経済新聞, 2020b; 延広・Reynolds, 2020; SankeiBiz, 2020; ICT教育ニュース, 2020; ニッポン放送NEWS ONLINE, 2020など）。本学でもそうした世界的な流れの中で、双方向通信型の授業やオンデマンド型の授業等を各教員が手探りで実施してきたが、講義・演習（ゼミ）・実験/実習・語学などのさまざまな種類の授業がある中で、こういった種類の授業では、こういったやり方で授業を行うことが適しているのか、換言すれば、授業の種類によって、学生が受けやすく、わかりやすい授業の提供ができるのかもわからずに、教員がそれぞれ創意工夫をし、デジタル・デバイスをとおして授業を行うしかなかった。

こうした社会的状況と大学の置かれた状況を踏まえ、前期末に行われた「授業評価アンケート」の中に、今回コロナ禍の中、特別に設けられた当該の授業の種類と授業の実施方法に関する評価を分析し、授業の種類別に学生からの評価の高かった授業方法を見つけ出すべく、FD委員として分析を試みた（笠原, 2020b）。また、後期末に実施された「授業評価アンケート」も同様の形式であったため、前期・後期・通年での学生からの評価をもとに、全学および本学部における授業の種類別に適した授業方法を探る報告書の執筆も検討した。2019年度の報告書は近年盛んに耳にし、認証評価等においてもたびたび取りざたされる「ディプロマ・ポリシー」を題材に質問フォームを作成し、卒業式の時に「学部での学び『到達度調査』」としてアンケート調査を行い、その結果報告を行っている（笠原, 2020a）。2020年度卒業生のディプロマ・ポリシーは、2019年度卒業生のディプロマ・ポリシーから改訂された個所があるため、調査および2019年度の結果と比較対照してみる価値があると考えたが、最終的には2020年度、本学部の執行部の中でも、また学部教務委員会の中でも、その有効な取り扱い方や利用のしかたについてたびたび議論になった「Can-Do-List」を題材に調査フォームを作成し、卒業時の「学部での学び『到達度調査』」として行うことにした。本報告書はその回答結果報告である。本稿は報告書であるため、あえて考察は行わず、この結果をどのように見るかは、本報告書を読んだ個々人、特に本学部の教員一人ひとりに任せたいと考えている。

方 法

調査対象者

本調査の対象となったのは、国際コミュニケーション学部を2021年3月に卒業した学生234名（国際言語コミュニケーション学科118名、うち過年度生7名〔2020年9月に卒業した学生1名あり、当該の学生は3月卒業ではないため、本調査の対象には入っていない〕、表現文化学科116名、うち過年度生6名）である。しかし、回答者数を見てみると総計188名（国際言語コミュニケーション学科131名、表現文化学科57名）となっている。ここから考えられることとして、表現文化学科の学生が誤って「国際言語コミュニケーション学科」と回答しているケースが少なくとも13人はいるということである。国際言語コミュニケーション学科の学生が再回答したというケースも考えられなくはないが、13名すべてが再回答したとは考えにくい。また、国際言語コミュニケーション学科の卒業生118名全員が回答したとも考えにくく、国際言語コミュニケーション学科として回答されているものの中に、ある一定数の表現文化学科の学生の回答が混在してしまっていると考えるのが妥当であろう。

分析にあたっては、こうした誤回答あるいは重複回答をできる限り排除するために、国際言語コミュニケーション学科として回答している131名の中からコンピュータによるランダム選択により118名を選びだすことも検討したが、国際言語コミュニケーション学科の卒業生の何名が回答しているか、その正確な人数もわからないため、本稿はあくまでも報告書であることをかんがみ、そこまでの対応処理は行わず、回答のすべてをそのまま利用し、分析することにした。

質問紙および設問項目

本調査で使用した設問項目は、2019年度に学部教務委員会で作成した「Can-Do-List」に用いられている項目である。この「Can-Do-List」は大学/学部での学びの到達度を4年間かけ、毎年、自己評価し、その到達の程度を確認していくような使い方を想定し作られたものである（Figure 1 参照）。

学びの項目	段階	学びの内容	到達度 ○△×
資料の探し方	1	図書館内のさまざまな資料の種類と保管場所を理解した。	
	2	図書館内の資料検索の方法を理解した。	
	3	電子図書や雑誌論文などの資料検索の方法を理解した。	
	4	他の図書館などからの資料取り寄せ方法を理解した。	
	5	適切な資料を探し出すことができるようになった。	
資料の読み方	1	資料（情報源）を信頼性という点から評価・序列化できるようになった。	
	2	資料を要約することができるようになった。	
	3	資料の要点を自分の言葉に置き換えて説明できるようになった。	
	4	自分の主張の根拠（evidence）を探し出す必要性を理解した。	
研究・研究倫理	1	高校までの勉強と大学での研究との違いを理解した。	
	2	研究活動における不正行為を理解した。	
	3	研究において問いと仮説を立てることの意味を理解した。	
	4	研究における反論・応答（ディベート）の意義を理解した。	
レポート・論文の書き方	1	レポート・論文の構成要素と形式を理解した。	
	2	パラグラフ・ライティングができるようになった。	
	3	引用のルールに従い、正しい引用ができるようになった。	
	4	引用文献リストをつくることができるようになった。	
発表の仕方	1	発表の基本的な形式と流れを理解した。	
	2	発表のレジュメ（ハンドアウト）を作成できるようになった。	
	3	時間配分に応じたスライド作成、発表ができるようになった。	
	4	聴き手を意識した発表ができるようになった。	

Figure 1 . 本学部で作成した Can-Do-List

当初、そこまで精緻なプロセスを踏んで作成されたものであるとは考えにくい、今回の調査にあたり、内的整合性を分析してみると大項目Ⅰの信頼性係数はCronbach $\alpha = .818$ （標準化された項目に基づいたCronbach $\alpha = .824$ ）；大項目Ⅱは、Cronbach $\alpha = .860$ （標準化された項目に基づいたCronbach $\alpha = .859$ ）；大項目Ⅲは、Cronbach $\alpha = .755$ （標準化された項目に基づいたCronbach $\alpha = .757$ ）；大項目Ⅳは、Cronbach $\alpha = .831$ （標準化された項目に基づいたCronbach $\alpha = .841$ ）；大項目Ⅴは、Cronbach $\alpha = .899$ （標準化された項目に基づいたCronbach $\alpha = .899$ ）が測定されており、各大項目とも非常に信頼性の高い下位項目から成り立っていることがわかる。これら5つの大項目間における信頼性係数はCronbach $\alpha = .817$ （標準化された項目に基づいたCronbach $\alpha = .831$ ）が測定されており、大項目間における信頼性係数も非常に高く、本リストは信頼のおけるものであることが示されている。

これらの項目をもとに、質問紙の作成にあたっては、Google Formを利用し、調査フォームを作成した。Figure 1 を見るとわかるように、その到達度は「○」「△」「×」の3段階で評価するようになっているが、本調査では、それぞれの項目に関し、「まったくそうではない」から「まったくそのとおりである」の4段階評価で回答するものにした。評価スケールの作成にあたっては、「①まったくそうでない、②…、③…、④まったくそのとおりである」という形での別個の選択肢にはせず、「①まったくそうではない」と「④まったくそのとおりである」を両端に配置し、その間に均等に目盛りを振ることにより、感覚的に回答できるものにした。

「学びの項目」の最初の大項目（大項目Ⅰ）には、5つの下位項目があるが、5つめの小項目を本調査フォームに加えるのを失念してしまった。そのため、本調査では大項目Ⅰに関しては、下位項目の1から4までの4項目について回答する形式になっていることを報告しておく。

手 順

2019年度は新型コロナウイルス感染症の影響から、例年、名古屋国際会議場で行われる卒業式自体が執り行われなかったという事態が発生したが、2020年度は各学部棟をはじめとするキャンパス内の施設を使い、卒業式が挙行された。本学部は学部棟内の教室（509室：国際言語コミュニケーション学科、417室と418室：表現文化学科）を3室使い、各学科別に卒業式が執り行われた。

2018年度までは、卒業式の会場で、紙媒体で作成した調査紙を配布し、その場で回収を行っていたが、笠原（2020a）にあるように、2019年度は卒業式そのものが執り行われなかったため、学位記をはじめとする各種物品を教務課から各学生の自宅に送り出す際、例年、卒業式の会場で行ってきた「学部での学び『到達度調査』」への回答を依頼する文書も同梱し、卒業生に回答を依頼した。こうした社会的状況から、2019年度より紙媒体での質問紙は止め、URLもしくはQRコードから質問フォームにアクセスする形態にした（Figure 2 参照）。

既述のとおり、2020年度は学内で卒業式が執り行われたため、式の最中に各自の持っているスマートフォンから質問フォームにアクセスし、回答するよう、各教室担当の教務課スタッフから指示を出してもらった。当日、何らかの事情により卒業式の間に回答できなかった場合は、2021年3月19日までに回答するように回答依頼文書に記しておいた。また、回答の受け付けは3月19日の23時59分までとし、3月20日から回答の集計作業に入った。

【「学部での学び」到達度調査】回答のお願い

卒業、おめでとうございます。この2021年3月15日をもって、みなさんは大学4年間の学びにピリオドを打ち、4月からは各々別々の道を歩むことになりました。このアンケートは、みなさんの本学部・学科での4年間の学びの到達度を自己評価していただくものです。大学という場で身につけるべき力をこの4年間でどれくらい獲得することができたと感じているか、お答えいただきたいと思います。なお、このアンケートは回答者の特定はできないようになっていますので、率直にありのままをお答えください。極端に厳しく自己評価する必要もありませんし、甘く評価する必要もありません。ご自身が感じたままにお答えください。よろしくお願いします。



※ 今、この場で回答を済ませるようにお願いします。スマホが手元にないため、回答ができないという方は3月19日（金）までに回答を済ませ、送信してください。

Figure 2. 卒業生に「学部での学び『到達度調査』」への協力を依頼する文書

分 析

Google Formを利用し、調査フォームを作成したため、まずGoogle Sheetに回答データを集約し、それをExcel Microsoft 365に変換した。分析にあたっては、Excel Microsoft 365を用いて記述統計を取り、両学科間の回答結果の平均の差をみるため、 t 検定を実施した。その後、IBM SPSS Statistics 27にデータを移植し、より精緻な分析およびデータの検討を行った。具体的には、両学科間の下位項目および大項目間における差を確認するために分散分析（ANOVA）や各大項目を支えている下位項目間および各大項目間の設問内容の内的整合性の分析を行い、信頼性係数を求めた。

結 果

Can-Do-List の各項目に見られる到達度の自己評価

集計分析結果は以下のとおりであった（Table 1 参照）。

Table 1. Can-Do-List の各項目の到達度（自己評価）

「学部での学び」項目	平 均			p
	学部	国際言語	表現文化	
〈I. 図書館利用と資料を検索する力〉	3.07	3.00	3.21	.067 ($n.s.$)
I -1) 図書館内のさまざまな資料の種類とその保管場所がわかる。	3.01	2.93	3.18	.089 ($n.s.$)
I -2) 図書館内の資料検索の方法がわかる。	3.43	3.37	3.58	.092 ($n.s.$)

I -3) 電子図書や雑誌論文などの資料の検索方法がわかる。	3.23	3.16	3.40	.078 (<i>n.s.</i>)
I -4) 他の図書館などからの資料取り寄せ方法がわかる。	2.60	2.56	2.70	.376 (<i>n.s.</i>)
〈Ⅱ. 資料を読み解く力〉	3.09	3.05	3.19	.139 (<i>n.s.</i>)
Ⅱ -1) 資料（情報源）の種別を信頼性・信憑性という点から評価・序列化できるようになった。	2.97	2.97	2.98	.856 (<i>n.s.</i>)
Ⅱ -2) 資料を要約することができるようになった。	3.10	3.04	3.25	.061 (<i>n.s.</i>)
Ⅱ -3) 資料の要点を自分の言葉に置き換えて説明できるようになった。	3.10	3.04	3.25	.067 (<i>n.s.</i>)
Ⅱ -4) 自分の主張の根拠（evidence）を探し出す必要性を理解した。	3.22	3.19	3.30	.292 (<i>n.s.</i>)
〈Ⅲ. 研究および研究倫理に関する知識〉	3.59	3.59	3.58	.937 (<i>n.s.</i>)
Ⅲ -1) 高校までの勉強と大学での研究との違いを理解した。	3.71	3.70	3.73	.631 (<i>n.s.</i>)
Ⅲ -2) 研究活動における不正行為を理解した。	3.71	3.68	3.78	.371 (<i>n.s.</i>)
Ⅲ -3) 研究において問いと仮説を立てることの意味を理解した。	3.51	3.52	3.50	.979 (<i>n.s.</i>)
Ⅲ -4) 研究における反論・応答（ディベート）の意義を理解した。	3.44	3.48	3.34	.151 (<i>n.s.</i>)
〈Ⅳ. レポートおよび論文を書く力〉	3.54	3.58	3.46	.191 (<i>n.s.</i>)
Ⅳ -1) レポート・論文の構成要素と形式を理解した。	3.63	3.60	3.70	.253 (<i>n.s.</i>)
Ⅳ -2) パラグラフ・ライティングができるようになった。	3.34	3.43	3.13	.016*
Ⅳ -3) 引用文献リストをつくることができるようになった。	3.63	3.68	3.52	.140 (<i>n.s.</i>)
Ⅳ -4) 引用のルールに従い、正しい引用ができるようになった。	3.58	3.62	3.52	.301 (<i>n.s.</i>)
〈Ⅴ. 口頭発表（プレゼンテーション）に関する力〉	3.46	3.54	3.29	.015*
V -1) 発表の基本的な形式と流れを理解した。	3.50	3.57	3.36	.064 (<i>n.s.</i>)
V -2) 発表のレジュメ（ハンドアウト）を作成できるようになった。	3.52	3.62	3.29	.004*
V -3) 時間配分に応じたスライド作成、発表ができるようになった。	3.39	3.48	3.18	.025*
V -4) 聴き手を意識した発表ができるようになった。	3.44	3.49	3.32	.137 (<i>n.s.</i>)

(総回答者数：N=188, 国際言語：n=131, 表現文化：n=57)

大項目Ⅰ. 図書館利用と資料を検索する力

大項目Ⅰの学部全体の平均 3.07；国際言語コミュニケーション学科の平均 3.00；表現文化学科の平均 3.21であった。本大項目において、学科間に有意な差は認められなかった($p = .067, n.s.$)。下位項目の中で、到達度の自己評価としてもっとも高かったものは、両学科ともに「図書館内の資料検索の方法がわかる」であった（学部全体 $M = 3.43$ ；国際言語 $M = 3.37$ ；表現文化 $M = 3.58$ ）。逆に、到達度の自己評価としてもっとも低かったものが、両学科ともに「他の図書館などからの資料取り寄せ方法がわかる」であった（学部全体 $M = 2.60$ ；国際言語 $M = 2.56$ ；表現文化 $M = 2.70$ ）。学科間の平均値に有意な差は下位項目のすべてにおいて認められなかった（ $p > .05, n.s.$ ）。

大項目Ⅱ．資料を読み解く力

大項目Ⅱの学部全体の平均 3.09；国際言語コミュニケーション学科の平均 3.05；表現文化学科の平均 3.19であった。本大項目において、学科間に有意な差は認められなかった ($p = .139, n.s.$)。下位項目の中で、到達度の自己評価としてもっとも高かったものは、両学科ともに「自分の主張の根拠 (evidence) を探し出す必要性を理解した」であった (学部全体 $M = 3.22$ ；国際言語 $M = 3.19$ ；表現文化 $M = 3.30$)。逆に、到達度の自己評価としてもっとも低かったものが、両学科ともに「資料 (情報源) の種別を信頼性・信憑性という点から評価・序列化できるようになった」であった (学部全体 $M = 2.97$ ；国際言語 $M = 2.97$ ；表現文化 $M = 2.98$)。学科間の平均値に有意な差は下位項目のすべてにおいて認められなかった ($p > .05, n.s.$)。

大項目Ⅲ．研究および研究倫理に関する知識

大項目Ⅲの学部全体の平均 3.59；国際言語コミュニケーション学科の平均 3.59；表現文化学科の平均 3.58であった。本大項目において、学科間に有意な差は認められなかった ($p = .937, n.s.$)。下位項目の中で、到達度の自己評価としてもっとも高かったものは、国際言語の学生は「高校までの勉強と大学での研究との違いを理解した」 ($M = 3.70$) であった。一方、表現文化の学生は「研究活動における不正行為を理解した」 ($M = 3.78$) であった。逆に、到達度の自己評価としてもっとも低かったものは、両学科ともに「研究における反論・応答 (ディベート) の意義を理解した」であった (学部全体 $M = 3.44$ ；国際言語 $M = 3.48$ ；表現文化 $M = 3.34$)。学科間の平均値に有意な差は下位項目のすべてにおいて認められなかった ($p > .05, n.s.$)。

大項目Ⅳ．レポートおよび論文を書く力

大項目Ⅳの学部全体の平均 3.54；国際言語コミュニケーション学科の平均 3.58；表現文化学科の平均 3.46であった。本大項目においては、学科間に有意な差は認められなかった ($p = .191, n.s.$)。下位項目の中で、到達度の自己評価としてもっとも高かったものは、国際言語の学生は「引用文献リストをつくることできるようになった」 ($M = 3.68$) であった。一方、表現文化の学生は「レポート・論文の構成要素と形式を理解した」 ($M = 3.70$) であった。逆に、到達度の自己評価としてもっとも低かったものは、両学科ともに「パラグラフ・ライティングができるようになった」であった (学部全体 $M = 3.34$ ；国際言語 $M = 3.43$ ；表現文化 $M = 3.13$)。そして、この項目に関しては、学科間の平均値に有意な差が認められた ($p = .016$)。

大項目Ⅴ．口頭発表 (プレゼンテーション) に関する力

大項目Ⅴの学部全体の平均 3.46；国際言語コミュニケーション学科の平均 3.54；表現文化学科の平均 3.29であった。本大項目において、学科間に有意な差が認められた ($p = .015$)。唯一、学科間に差の認められた大項目である。下位項目の中で、到達度の自己評価としてもっとも高かったものは、国際言語の学生は「発表のレジュメ (ハンドアウト) を作成できるようになった」 ($M = 3.62$) であった。一方、表現文化の学生は「発表の基本的な形式と流れを理解した」 ($M = 3.36$) であった。逆に、到達度の自己評価としてもっとも低かったものは、両学科ともに「時間配分に応じたスライド作成、発表ができるようになった」であった (学部全体 $M = 3.39$ ；国際言語 $M = 3.48$ ；表現文化 $M = 3.18$)。そして、以下の 2 項目において、学科間の平均値に有意な差が認められた：「発表のレジュメ (ハンドアウト) を作成できるようになった」 (学部全体 $M = 3.52$ ；国際言語 $M = 3.62$ ；表現文化 $M = 3.29$ ； $p = .004$)；「時間配分に応じたスライド作成、発表ができるようになった」 (学部全体 $M = 3.39$ ；国際言語 $M = 3.48$ ；表現文化 $M = 3.18$ ； $p = .025$)。

自由記述の回答

自由記述欄には、以下の 8 つのコメントが記されていた (Table 2 参照)。

Table 2. 自由記述回答に記されていたもの

国際言語) 大学生活とても楽しかったです。新しい学びが多くあり、刺激的な毎日でした。

国際言語) 楽しい学校生活でした。ありがとうございました!!!

国際言語) 必修の科目において、先生のやる気度が異なるのはいかなものかと思います。

国際言語) 第二言語をもう少し深く習得できる授業があるといい。

国際言語) お世話になりました!

国際言語) 第二言語をもう少し深く習得できる授業があるといい。

国際言語) 大学生活とても楽しかったです。新しい学びが多くあり、刺激的な毎日でした。

表現文化) それらの力は大学1・2年生の時の講座があったからこそ3・4年で活用出来ました。オンラインではなく全面对面授業を希望します

(学生が記述したとおりに掲載)

自由記述への回答は全部で8つあった(4.26%)。その内訳は、国際言語コミュニケーション学科の卒業生から7つ(5.34%)、表現文化学科の卒業生から1つ(1.75%)という結果であった。その多くは肯定的な記述であったが、要望にあたるようなものとして「第二外国語をもっと深く習得できる授業があるといい」が2つ、大学生活の最後の1年がコロナ禍により、リモート授業となったため「オンラインではなく、全面对面の授業を希望します」というものもあった。学部として深刻に受け止めなければならない記述として「必修の科目において、先生のやる気度が異なるのはいかなものかと思います。」というものがあった。この「必修の科目」というのは、おそらく「ファーストイヤーゼミ」、もしくは3年次・4年次のゼミ(「研究ⅠA・B」「研究ⅡA・B」)および卒業論文指導(「卒業論文」)であろうと思われる。ここに指摘したような科目は学部教育の根幹となる科目でもあり、取り扱う内容や指導のあり方に担当者によりその温度差があるというのは是正しなければならない点と考える。

おわりに

新型コロナウイルス感染症の世界的なパンデミックに大きな影響を受けた2020年度、学部FD活動報告書として、学部教務委員会が2019年度に作成した「Can-Do-List」を用いて、例年、卒業式の時に行っている「学部での学び『到達度調査』」を実施し、その結果報告を行った。その結果、多くの部分で学科間に差は見られなかったが、以下の3つの下位項目:「Ⅳ-2) パラグラフ・ライティングができるようになった(学部全体 $M=3.34$; 国際言語 $M=3.43$; 表現文化 $M=3.13$; $p=.016$)。」「Ⅴ-2) 発表のレジュメ(ハンドアウト)を作成できるようになった(学部全体 $M=3.52$; 国際言語 $M=3.62$; 表現文化 $M=3.29$; $p=.004$)。」「Ⅴ-3) 時間配分に応じたスライド作成、発表ができるようになった(学部全体 $M=3.39$; 国際言語 $M=3.48$; 表現文化 $M=3.18$; $p=.025$)。」において学科間に有意な差が認められた。また、「大項目Ⅴ. 口頭発表(プレゼンテーション)に関する力(学部全体 $M=3.46$; 国際言語 $M=3.54$; 表現文化 $M=3.29$; $p=.015$)」に学科間の有意な差が認められた。ともに国際言語コミュニケーション学科の学生の方が有意に高い到達度を回答していた。本稿は報告書でもあることから、昨年度の報告書と同様、あえてこうした結果に対して考察は行わず、結果を報告するだけに止めた。この結果を見て、どういったことが考えられるかは、この報告書を読まれた方々や本学部に所属する教員一人ひとりに委ねたいと思う。また、それをきっかけに学部教育のあり方やカリキュラムを改編する際の何らかの参考になればと願う次第である。

引用文献

- 中部経済新聞(2021). 日本財団10代意識調査 教育デジタル化進めて「遅れている」4割 2021年1月20日
https://www.chukei-news.co.jp/news/2021/01/20/OK0002101200f01_04/
ICT教育ニュース(2020). 17~19歳男女の38.1%が「日本のデジタル化は遅れている」と回答 = 日本財団調べ = 2020年12月25日 <https://ict-enews.net/2020/12/25/nippon-foundation/>

時事ドットコムニュース (2020) . 日本「一刻の猶予もなし」デジタル化遅れ表面化―骨太原案 2020年 7 月 9 日 <https://www.jiji.com/jc/article?k=2020070801025&g=eco>

笠原 正秀 (2020a) . 3 - 2 国際コミュニケーション学部 学部FD活動報告 梶山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント 梶山女学園大学・大学院FD活動報告書 (2019年度) https://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/news/assets/docs/fd_20.pdf

笠原 正秀 (2020b) . 2020年度前期授業アンケート 2 要因による分散分析と相互作用分析 (単純主効果検定) 【全データ】 20201202 2020年12月 2 日 全学FD委員会MLにて配信

毎日新聞 (2020a) . 大学はなぜ本格再開しない? クラスター発生、学生の孤立化…絡み合う懸念 特集 新型コロナウイルス 2020年 6 月 6 日 <https://mainichi.jp/articles/20200606/k00/00m/040/081000c> ;

毎日新聞 (2020b) . 安田賢治のここだけの話 なぜ、大学はまだオンライン授業が中心なのか? 特集大学関連ニュース 2020年 9 月29日 <https://mainichi.jp/articles/202029/org/00m/100/009000c>

日本経済新聞 (2020a) . 政府デジタル化の遅れ挽回…デジタル庁の役割は? 親子スクール・ニュースイチから 2020年11月 1 日 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO65649980Q0A031C2NZGP00/>

日本経済新聞 (2020b) . 学校デジタル化、最下位の日本 1 人 1 台で何を学ぶ? 2021年 1 月 1 日 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFK2156T0R21C20A2000000/>

ニッポン放送NEWS ONLINE編集部 (2020) . 新型コロナで露呈した日本のデジタル化の遅れ ニッポン放送NEWS ONLINE 2020年 6 月23日 <https://news.1242.com/article/230878>

延広 絵美・Reynalds, I. (2020) . 日本のデジタル化は「10年遅れ」、コロナ契機に転換を―平副大臣 Bloomberg 2020年 5 月21日 <https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2020-05-21/QAKJICT1UM1201>

SankeiBiz (2020) . コロナで遅れ露見 デジタル化に 1 兆円 <https://www.sankeibiz.jp/business/news/201221/bsj2012211832003-n1.htm>

高橋 暁子 (2020) . 小中高は再開したのにどうして? --オンライン授業が続く「大学生」たちの悲鳴 CNET Japan 2020年 8 月 8 日 <https://japan.cnet.com/article/35157711/>

読売新聞オンライン (2020) . コロナと大学 対面授業の実施へ知恵を絞れ 社説 2020年 8 月16日 <https://www.yomiuri.co.jp/editorial/20200815-OYT1T50327/>

読売新聞オンライン (2021) . デジタル化「遅れ」4 割 2021年 2 月28日 <https://www.yomiuri.co.jp/life/digilife/data/20210227-OYT1T50224/>

1. はじめに

人間関係学部は2020年度にカリキュラム改革4年目を迎えた。改革の主軸である「モジュール制」が導入された2017年度入学生が4年次に進級したことにより、改革が一応の完成をみたことになる。3年次から履修する少人数教育である「ケースメソッド」と「演習」授業が、11のモジュールと紐づけられ、学びの体系化が行われているところである。今年度はモジュール制導入初年度の学生が卒業を迎えるにあたり、学部全体での卒論発表会を開催し、卒業時にはモジュール履修証明書が発行された。

さらに、国家資格である公認心理師については、養成カリキュラムが2018年度の心理学科入学生からスタートし、2019年度には「公認心理師の職責（2年次・資格取得者必修）」が新たに開講された。今年度には、3年次必修である「関係行政論」および演習・実習授業が新たに開講された。

2. 人間関係学部FD活動の概要

上述のように、カリキュラム改革および資格取得養成カリキュラムは改革途上にある。全体の成果について検討するのは完成年度を終えた後になるが、以下に本年度に行った活動、行えなかった活動をまとめる。

1) 初年度教育における学生の協力によるFD活動

①新入生オリエンテーション時

例年実施しているオリエンテーション時における学生の協力については、今年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のために、実施することができなかった。

②ファーストイヤーゼミでのチュートリアルセミナー

例年実施しているファーストイヤーゼミでのチュートリアルセミナーにおける学生の協力についても、今年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のために、実施することができなかった。

2) 2年次以降の授業における学生の協力によるFD活動

①心理学科2年次必修授業「心理学実験」「心理学特殊実験」に関するFD活動

心理学科2年次必修科目である「心理学実験」および「心理学特殊実験」では、大学院生がリモート、対面ともにTAとして補助に入り、学びの活性化につながる助言を行った。

②卒論発表会におけるFD活動

日時：2021年2月1日（月）

内容：モジュール制が導入された学年が4年生となる。今年度は両学科必修として開催されたが、リモート開催となったために、学生の協力を仰ぐことができなかった。

3) 教員によるFD活動

①授業アンケートの実施とふりかえり

7月、1月に全学で実施される授業アンケートを予定通り実施した。授業終了後、アンケート結果を参考に授業内容を振り返り、リフレクションペーパーへの記載を通してシラバスの改善を図った。今年度は、授業形態がオンラインになったことにより、学生・教員ともに前期は戸惑いが見られ、そのメリット、デメリットが授業アンケートから浮かび上がってきた。後期にはそれらの反応を踏まえた改善を各教員が実施して、次年度への課題も見出すことができた。

②重度身体障害学生の受け入れに関するFD活動

本年度、重度身体障害学生を本学部を受け入れることに伴い、「重度身体障害学生の受け入れに関する説明会」を開催した。

4月7日（火）11:00～12:30の一時間半、本学部の手嶋雅史先生から、受け入れに伴う現状と課題に

ついでの説明を受けた。本年度は、ほとんどの授業がリモートによる実施になったことに伴い、通常とは違う配慮の必要が生じたりと、次年度に向けての課題も残ったが、この説明会を経て、受け入れに臨めたことは、教員にとっての不安の解消に役立ったと思われ、実施の効果を実感できた。来年度以降、引き続き合理的な配慮をしっかりと保ち、重度身体障害学生の学びの環境を整えていきたい。

以上

活動計画

2020年度の文化情報学部におけるFD活動計画は、下記のとおりである。

1. テーマ

文化情報学部におけるルーブリック評価導入の為の検討とルーブリック表の作成

2. 目的

文化情報学部各学科の教育においてルーブリック評価を取り入れる為の検討を行うとともに、各学科の学生の学習到達状況を評価するための評価基準となるルーブリック表（案）の作成を目指す。

3. 方法

各学科の教育内容検討会議におけるルーブリック評価の導入に関する議論の経緯、および各学科での年度内の取り組みに関する報告を収録する。

4. 報告書

PDF形式で2021年3月の刊行とする。

実施結果

上記計画の実施結果は、全71ページ（本文65ページ）のPDF媒体で以下のとおり刊行された。

名 称：2020（令和2）年度文化情報学部FD活動報告書文化情報学部におけるルーブリック評価導入の為の検討とルーブリック表の作成

編 集：見田隆鑑・谷口俊治

発 行：椋山女学園大学文化情報学部

発行日：2021（令和3）年3月31日

以上

1. 現代マネジメント学部におけるFD活動の概要

2020年度の現代マネジメント学部におけるFD活動は、学部FD研修会の開催、ならびに学修行動比較調査の学部別分析結果報告会への参加である。2014年度までは、「教育研究報告」の発行、「学生生活評価アンケート」の実施、及び現代マネジメント研究会（FD講演会）が行われてきたが、2015年度以後は、現代マネジメント研究会（FD講演会）は実施していない。今年度は、昨年と同様に「教育研究報告」の発行は行わず、以下3つの活動が実施された。本報告では、現代マネジメント学部におけるFD活動としてこれらの概要を報告する。

2. 2020年度FD活動

2.1 入試結果の分析と来年度へ向けての動向についての報告会への参加

題目：2020年度入試振り返りと2021年度入試の動向について

日時：2020年10月13日（火） 13：20～14：00

場所：現代マネジメント学部棟206教室

講師：株式会社KEIアドバンス名古屋営業部 小林リサ様（Zoomでの講演）

〔総括〕

社会科学系学部の全体傾向を概観した上で、2020年度における現代マネジメント学部の志望状況や偏差値、学力分布の状況確認ならびに競合大学学部との比較を行なった。東海地区においては、安定志向の影響で中堅校に志願者が集中する傾向にあること、一方でコロナによる就職状況悪化の影響を受け、社会科学系学部が敬遠され始めているなど、本学部入試の志望状況が見えづらい現状についても情報共有し、議論した。

2.2 ALCS学修行動比較調査2019：学部別分析結果報告会への参加

題目：ALCS学修行動比較調査2019調査結果

日時：2020年11月26日（木） 17：00～18：00

場所：学園センター5階 507室

〔総括〕

現代マネジメント学部は、全学的にみて「経験」と「成長」カテゴリが低い傾向にある。「経験」では、「自発的に文献や資料を調べること」「課題発表の機会」などが1年生次のカリキュラムに取り入れられていないことに起因しているものと思われる。「成長」については、ほぼ全ての項目で50名上が「変化なし」と回答しており、結果として「満足」カテゴリでも他学部に比して低い結果となっている。報告会では討議も活発に行われ、教員の前向きな姿勢がみられた。

2.3 ALCS学修行動比較調査2020：1年生・3年生調査結果報告の検討

題目：ALC学修行動比較調査2020分析結果を踏まえて

日時：2021年3月9日（火）定例教授会にて

場所：現代マネジメント学部棟206教室

〔総括〕

学修経験、成長感、満足感のいずれに評価についても、1年生よりも3年生で高くなっている。これは、1年生が初年度より（コロナ禍で）ほとんどの授業をオンラインで受講したことによるものと思われる。

一方で 1 年生の学修時間は2019年度の 1 年生より長くなっているが、こちらもオンライン授業により課題提出の機会が増加したものと推察される。3 年生の学修時間については、授業に関するものは全学的にみても低い水準にとどまっているが、授業に直接関係しないものに関しては相対的に高くなっている。後者の学修時間が長い理由は、資格取得に費やす時間によるものと思われるが、授業の予習復習にも時間配分を増やすような工夫が必要である。

1. 教育学部独自に実施したFD活動について

(1) 「遠隔授業の効果的な進め方」研修会の開催

日時：2020年5月5日（火）15：00～16：30

場所：Zoom

講師：坂本徳弥先生（教育学部教授）

対象：教育学部教職員・教育学部で授業をする非常勤講師（21名が参加）

目的：令和2年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、遠隔授業を行うことになった。本研修会ではZoomを用いた遠隔授業の進め方について技術的な操作方法の習得を目指すとともに、遠隔授業の効果的な進め方について教職員の知恵を結集し、遠隔授業の教育効果を高めることを目的とする。

概要：

最初に坂本教授からZoomを使った遠隔授業を進めるうえでの技術的な操作方法についての解説（画面共有の方法、チャットの使い方、参加者を一覧できる画面表示の方法）があり、オンデマンド型遠隔授業に比べて、Zoomを使った遠隔授業の利点について説明があった。利点とは①学生が時間割通りに規則正しく学習できる（課題をため込んで疲弊することがない）、②学生が教員にライブで質問したり、ブレイクアウトセッションを設けて小集団で議論したり、主体的に授業に参加できる、③教員もこれまで授業準備のために作成してきたPPTや資料を「画面共有」することで、対面の授業とほとんど変わらないかたちで授業ができる。なお、レポートの管理には、Zoomではなく、Google Classroomの利用が便利（オンラインで採点でき、提出状況や成績などが一覧できる）。最後に参加者からの質疑に応答する時間を設けた。

※遠隔授業については、上記の研修会に加えて教員の自主的な勉強会が開催された。

例えば、

日時：2020年4月24日（金）20：00～21：00

場所：Zoom

ファシリテーター：安達理恵先生（教育学部教授）

対象：教育学部教職員

内容：①ZOOMの使い方講習、②ZOOM以外の遠隔授業も含めたなんでも相談会が持たれた。

(2) 研究倫理に関する講習会

日時：2020年9月24日（木）と9月30日（水）12：30～13：10

場所：Zoom

講師：山田真紀（教育学部教授）

対象：教育学部教員および教育学部3・4年生、教育学研究科学生

目的：教職員および学生において、研究倫理についての共通理解を図り、特に、卒業論文執筆中の4年生と、修士論文執筆中の修士課程学生においては、盗用や剽竊などの倫理違反を起こさないようにする。

概要：講習会で使用した資料を巻末資料として添付した。

2. 2020年度教育学部FD活動のふりかえり

(1) 良かった点

- ①2020年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、遠隔授業を行うという事態となり、この状況に適切に対応できるように、教育学部内でも研修会や自主勉強会を行い、教員も新たな授業方法の習得のために研鑽を積むことができた。
- ②これまで卒業研究や修士論文において、基本的な研究倫理や論文作法をふまえていない研究が散見されていたことから、学部4年生や修士課程2年生の学生が本格的に論文を執筆しはじめる9月に「研究倫理講習会」を開くことができた。また欠席者や復習したい学生のために講習会の様子を撮影し、YouTubeに限定公開することで、講習会の内容が教職員や学生に行き渡るようにした。本研修会は教職員からも学生からも好評を博することができた。

(2) 改善点・今後の課題

- ①例年、1月に実施している「明日の保育・教育を考える」FD講演会は、諸般の事情により実施することができなかった。来年度は、3名の教授がご定年を迎えられることもあり、ご退職される先生方に教職員や学生へ向けてのご講演をいただけるよう、今から準備していきたい。
- ②今後は「学生の生の声をいかにFD活動に生かしていくか」について検討を進めたい。学生の生の声をFDに生かすためのルートとして、現在は授業アンケートと目安箱の設置がある。しかしながら、授業アンケートはルーティン作業のようになっており、自由記述欄に記入する学生も少なくなっており、また、目安箱も学生の実名を記入しないといけないルールから投書をためらう学生も少なくない。学生と教員の座談会などを設け、学生の率直な意見を吸い上げ、学部の改善に生かしていくような仕組みを構築することが求められる。

研究と論文のマナー研修会 資料

文責 山田真紀 (学部FD委員・研究倫理委員)

1. 研究のマナー

- 卒研をめぐる事件 1 レズビアン調査
卒研をめぐる事件 2 性体験を問う質問紙調査
卒研をめぐる事件 3 子どもの学力は遺伝か環境かに関する質問紙調査

2. 人を対象とする調査研究のマナー “研究だから何をしてもいい”はNG!

調査対象者の人権とプライバシーを守る

- ・そもそも人に聞いていい質問かを指導教員と慎重に検討
- ・匿名性の確保（データの処理・公表において／質問紙の提出方法）
- ・研究の概要を説明して、いつでも研究協力をお断りできる環境を整える
- ・もぐり調査は禁止（ボランティア先で見聞きしたことを卒論に書きたい場合）
校長先生と担当の先生の許可を得る

※大学院生の場合は教育学部研究倫理委員会に「人を対象とする研究 実施届」を必ず提出すること。

3. 論文のマナー

※マナーを守らないと命取り「単位が取得できない」「研究者として抹殺」

(1) 盗用（剽窃）、捏造・改竄とは何か？

捏造…存在しないデータ、研究結果等を作成すること。

改竄…研究資料・機器・過程を変更する操作を行い、データ、研究活動によって得られた結果等を真正でないものに加工すること。

盗用…他の研究者のアイデア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を当該研究者の了解又は適切な表示なく流用すること。

(参考) 文部科学省「研究活動の不正行為への対応のガイドラインについて」(12頁)

(2) 適切な引用方法 ※各ゼミの方針を確認しましょう

パターン 1 (自分の言葉で内容を説明し、参照先を示す方法)

山田は「研究と論文のマナー」という本のなかで、最近、卒業論文や修士論文において、インターネットからの情報をコピー＆ペーストして参照先を示さない剽窃にあたる行為が散見されると危機感を示している（山田2020）。

引用文献 ※引用文献の示し方 A パターン

山田真紀2020『研究と論文のマナー:大学生が守らなければならない10のルール』椋山出版会、105頁。

山田真紀2020「研究と論文のマナー」宮川充司編著『大学生が守らなければならない研究倫理の10のルール』椋山出版会、90－105頁。

パターン 2 (本や論文の一部を「」で抜き出して、参照先を示す方法)

山田は「研究と論文のマナー」という論文のなかで、「最近の卒業研究や修士論文では、十分な研究者倫理を学ばず、研究倫理に抵触するような場合や、引用を適切に行わず、剽窃に該当する行為が横行するなど危機的な状況にある」⁽¹⁾と述べ、学生の研究倫理に対する意識の低下を憂慮して

いる。

注と参考文献 ※引用文献の示し方Bパターン

(1) 山田真紀「研究と論文のマナー:2020年度の大学生調査から」『椋山女学園大学研究紀要』第25号、2020年、pp.5 -18。

パターン 3 (本や論文のかなりの分量の一部分を抜き出して、参照先を示す方法)

山田は「研究と論文のマナー」という本のなかで、研究をするうえで必ず守らなければならないマナーについて解説するために、以下のようなエピソードを紹介している⁽¹⁾。

(一行開け)

私の卒研指導生のAさんは、成績優秀で、教育社会学に関心をもち、特に子ども達の中に学力格差が生まれる要因に関心を持っていた。そして卒業研究では「子どもの学力は遺伝で決まるのか、環境で決まるのか」を明らかにしたいという。そしてある日、それを実証するための小学生対象の質問紙を持ってきた。そこには、遺伝的要因として、両親の学歴や学校歴、環境要因として、家庭の資産状況、両親の職業など、そして本人の学力水準としてクラスでの順位を自己評価させるような質問項目が並んでいた。

(一行開け)

※フォントと行間を下げて、引用であることを視覚的に分かるようにする。

パターン 4 (インターネットなどに掲載されている図表を転載する場合)

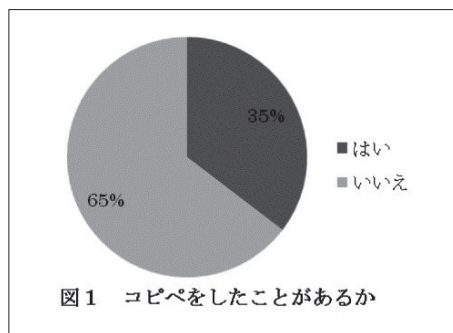


図1 コピペをしたことがあるか

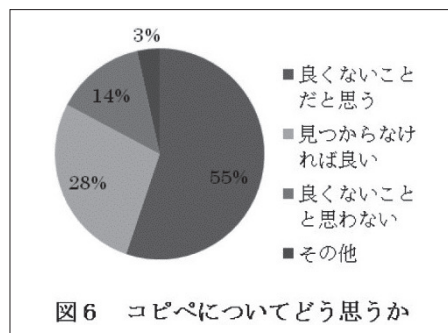


図6 コピペについてどう思うか

(出典) 杉光一成「大学等における“コピペ”問題の現状と対策及びその課題」より転載
<https://gakukai.univcoop.or.jp/pcc/paper/2010/pdf/58.pdf>

《ワンポイントアドバイス》

- ①論文や本を参照したら、著者名・論文名・雑誌名・出版年・参照した部分のページ数などを必ず控えておくこと。インターネット上の情報を参照する場合は、URLと参照した日の日付を控えておくこと。
- ②ワードの場合、引用を付ける場合、「参考資料」⇒「脚注(右下の→をクリック)」
脚注か文末脚注かを選んだり、数字を選んだりできる。ぜひ使ってみてください!
- ③1月8日までに仕上げれば良いという意識ではダメです。11月末日までに書き上げて1か月間、指導教員の先生やゼミ生にもよく読んでもらい、再分析のうえ、リライトしてから提出できるような時間配分で取り組みましょう。

以上

小林純子、高植幸子、奥川ゆかり、牧 茂義

I. 2020年度看護学部FD研修会について

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、対面授業から遠隔授業へと急遽切り替えを余儀なくされる状況から始まった。そのため、学生への不利益が生じないように、各教員が遠隔授業を円滑に実施できるように準備を行うことが必要であった。

そこで、看護学部では、まず遠隔授業のためのZoom、Google Classroom の習得のための研修会 1 を実施した。その結果、各教員が試行錯誤しながらも、遠隔授業による前期授業を終えることができた。遠隔授業については、教育効果をはじめ学生へのデメリットを案じる声が多く聞かれた。しかし、後期も遠隔授業が主体になることが予測されたことから、遠隔授業をより効果的に行うことおよび遠隔授業のデメリットだけに着目するのではなく、学生の視点からのメリット・デメリットを確認することを目的に研修会 2 を開催した。各詳細は以下の通りである。

1. 遠隔授業への対応のための研修会

1) Zoomの利用方法

開催日時：2020年 4 月 14 日（火）16：00～17：00

開催場所：101 講義室

目的：Zoom の使い方を理解する。

講師：教務委員長 佐原弘子教授

参加状況：3 密を避けるために各看護学領域 1 名程度の参加としたため、15 名。

2) Google Classroom の利用方法

開催日時：2020年 4 月 24 日（金）10：00～11：00

開催場所：101 講義室およびZoomによる遠隔実施

目的：大学の遠隔授業の実施方針を受け、遠隔授業が実施できるように Google Classroom の使い方を理解する。

講師：教務委員長 佐原弘子教授

参加状況：Zoomによるアクセスを含め、45 名。

2. 2020年度看護学部FD研修会

開催日時：2020年 9 月 1 日（火）10：30～11：30

開催場所：大学会館Spirit

目的：遠隔授業のメリット・デメリットを学生の視点から洗い出し、メリットを生み出すための工夫について情報を共有する。

テーマ：学生の視点に立った遠隔授業のメリット・デメリット ―各教員の工夫点―

研修方法：グループディスカッション

- ・事前に、各教員に実習・ゼミ以外の授業科目から 1 つを選択し、「主な遠隔授業の方法」「遠隔授業における工夫点」「学生の視点からのメリット・デメリット」についてそれぞれ 120 字程度での記述・提出を依頼する。
- ・職位・領域をランダムに 4～5 名 1 グループとして 8 グループを構成し、各グループでディスカッションを行う。

参加状況：後藤学長を含め 35 名出席。実習指導のため 8 名欠席。

3. 2020年度看護学部FD研修に関するアンケート結果

参加者35名にアンケートを配付し、30名（回収率85.7％）の回答を得た。

Q1. 研修会は有意義でしたか

大変有意義だった 25名（83.3％） やや有意義だった 5名（16.7％）

あまり有意義ではなかった 0名（0％） 有意義ではなかった 0名（0％）

〈主な理由〉

- ・他領域の先生の工夫や苦労などの話が聞け、有意義であった。
- ・今後の授業や実習計画に役立てることができそうである。
- ・情報共有だけでなく感情の共感もでき、気持ちが前向きになった。

Q2. 研修テーマは、興味・関心の持てるものでしたか

大変持てた 26名（86.7％） やや持てた 4名（13.3％）

あまり持てなかった 0名（0％） 持てなかった 0名（0％）

〈主な理由〉

- ・気がかりに思っていることを話すことができ、タイムリーな内容であった。
- ・遠隔授業が手探りの状態だったので、いろいろな意見を聞き、新たな方法を知ることができた。
- ・元気になれた。

Q3. 今後の教育活動・研究活動などに役立つ内容でしたか

大変役立つ 23名（76.7％） やや役立つ 7名（23.3％）

あまり役に立たない 0名（0％） 役に立たない 0名（0％）

〈主な理由〉

- ・試してみたい方法や工夫を聞くことができた。
- ・後期授業に活かしたい。
- ・技術を向上させることは難しいと感じた。
- ・気持ちが楽になる半面、後期授業の質の担保にプレッシャーもある。

Q4. 日程は適切でしたか。

適切だった 28名（93.3％） 適切ではなかった 1名（3.3％） 無回答 1名（3.3％）

〈主な理由〉

- ・前期終了時点であり、適切であった。

Q5. 時間は適切でしたか。

適切だった 28名（93.3％） 適切ではなかった 1名（3.3％） 無回答 1名（3.3％）

〈主な理由〉

- ・もう少し時間が長くてよかった。

Q6. 運営方法は適切でしたか。

適切だった 27名（90.0％） 適切ではなかった 0名（0％） 無回答 3名（10.0％）

〈主な理由〉

- ・グループ内での話を共有できる時間があるとよい。
- ・気軽に自由に話げできた。
- ・テーマを示してもらいたかった。
- ・新型コロナ感染症の感染拡大という状況で、配慮ある運営だった。

Q7. 今後のFD研修に対するご要望・ご意見等をお聞かせください。

- ・とてもタイムリーなものであり、よかった。
- ・定期的にこのような企画があるとよいと思う。

以上のアンケート結果により、学部FD研修会の目的は達成できたと考える。新型コロナ感染症の感

染拡大を危惧する中、最大限の感染予防に努めながらも最低限の1時間という時間での実施であったが、教員同士の交流すらできない状況下で、情報を共有しともに考える時間が持てたことは大変有意義であった。

Ⅱ. 学生による授業（実習）評価の実施について

1. 活動の経緯

2016年度よりS*mapのアンケート機能を用いた学生による実習評価の試行を開始、2018年度から課題探究実習（4～5名の少人数実習）を除く実習11科目に実施し、2020年度は、養護教諭実習を含む12科目（14種）の実習に実施した。昨年度後期から本年度前期に亘って行われた領域実習は、途中で遠隔または学内実習に変更された実習があり、本年度前期より実習施設の設問の選択項目に「遠隔または学内実習」を追加した。実習アンケート結果を受けての教員からのリフレクションは、評価を実施した実習科目すべてを学生に公開した。

2. 回答率と科目責任者へのデータの引き渡し

本年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い、遠隔・学内実習に切り替えた領域があり、全体の実習期間も延長した。そのため、3年生、4年生の回答終了日を2020年9月末日（昨年度8月末日）としたが、回答率の著しく低い実習があったため、10月末日まで入力を延長した。また、3年生の成人老年ベシック実習は、1月上旬に一部のグループの実習が開講されたため、回答終了日を2021年1月15日（昨年度8月末日）とした。1年生、2年生の回答終了日は例年通りに行った。回答率はどの実習も昨年より高かった（表1）。

得られたエクセルデータは、回答学生が特定できないよう、回答者ID、回答日時を削除するなどの加工をした。各実習アンケート結果の素データ及び集計結果をUSBメモリに保存し、各実習の科目責任者に渡した。

表1. 教員によるリフレクションまで完了した実習の回答率

期生	科目名	回答終了日	回答者数	回答率
8期生	母性看護学実習	10月末日	107/107	100 (80.7)
	小児看護学実習	10月末日	87/106	82.1 (79.8)
	急性期成人老年看護学実習	10月末日	86/106	81.1 (76.7)
	慢性期成人老年看護学実習（病院）	10月末日	100/106	94.3 (80.9)
	慢性期成人老年看護学実習（施設）	10月末日	93/106	87.7 (80.0)
	精神看護学実習	10月末日	83/107	77.6 (77.6)
	在宅看護学実習	10月末日	106/106	100 (82.5)
	公衆衛生看護学実習（行政）	10月末日	5/15	33.3 (73.3)
	公衆衛生看護学実習（産業）	10月末日	7/15	46.7 (67.0)
	看護管理実習	10月末日	93/107	86.9 (60.0)
	養護教諭実習	12月末日	4/4	100
9期生	成人老年ベシック実習	令和3年1月末日	81/104	77.9 (70.1)
10期生	基礎看護学実習	12月末日	97/103	94.2 (78.0)
11期生	早期体験実習	9月末日	91/102	89.2 (86.7)

() 昨年度

3. 学生への実習評価の説明

領域別オリエンテーション（9月）で、第9期生へ実習アンケートの目的を説明し、S*mapのアンケート機能で各領域別実習終了後に回答をするように依頼した。また、自由記載欄については、実習をよりよくしていくための建設的な意見の記入を依頼した。

4. 教員によるリフレクションの公開

全学の授業評価のリフレクションと同様の手続きで、学生の実習評価の結果を受けた教員によるリフレクションを学生に公開した。具体的な手続きは昨年度と同様とした。

委員会担当者が学生の評価をUSBメモリに保存し科目責任者へ渡す→科目責任者は必要な分析を行う→科目責任者はS*mapのアンケート回答欄にリフレクションを記載して委員会へ提出→委員会の担当者がリフレクション内容をPDFに変換し教務課へ提出→教務課が教務課（看護学部）キャビネットへリフレクションを掲載→委員会担当者が該当学生へ公開の案内をジャーナルで流す→学生がリフレクションを閲覧

教員からのリフレクションは、11月9日、1月19日、1月29日の3回、断続的に提出を依頼し、すべてのリフレクションの提出を終えたのは2月上旬であった。科目責任者からのリフレクションの提出はスムーズであり、キャビネットでの掲載を速やかに行うことができた。キャビネットでの公開時期は、該当年度末日までとした。

リフレクションの内容は、学生による実習評価の結果をグラフで示すかどうかも含め、昨年同様に各科目責任者に一任した。

5. 次年度の課題

引き続き、回答率を上げる工夫やリフレクションの公開方法について検討していく必要がある。回答率を上げるためには、各領域実習終了後に、領域担当教員から回答依頼を行うことが有効ではないかと考える。今後も、S*mapのアンケート機能を用いた学生による実習評価を継続して行っていく。

Ⅲ. 次年度の学部FD活動の課題

看護学部では、新カリキュラムに移行することもあり、教育方法・評価等をFD研修会のテーマとして実施することに加え、今回のような教員間の情報共有の場も継続できるように検討する。また、看護学部で毎年行っている実習アンケートのデータから、各看護学実習の課題を明確にし、次年度以降のFD活動につなげたい。これらの教員のニーズに基づくFD活動に加えて、第三者評価に耐えうる教育の充実の視点での活動を模索していく。

4 大学院FD活動報告

4－1 大学院FD委員会記録

4－2 大学院授業アンケート

(第1回) 2020(令和2)年5月29日(金) ～6月4日(木) メール会議	1 報告 (1) その他 ①大学・大学院F D活動報告書の執筆について 2 議題 (1) 2020年度大学院F D委員会活動計画に関する件 (2) 2020年度大学院授業アンケート(前期)に関する件 (3) その他
(第2回) 2020(令和2)年11月24日(火) 10:00～10:45	1 報告 (1) 2020年度前期大学院授業アンケート実施結果について (2) 博士後期課程学生を対象としたプレF D研修について (3) その他 2 議題 (1) 2020年度後期大学院授業アンケート実施に関する件 (2) 2020年度F D活動報告書に関する件 (3) その他
(第3回) 2021(令和3)年2月26日(金) 11:00～11:30	1 報告 (1) 2020年度後期大学院授業アンケート実施結果について (2) その他 ①2020年度大学院授業アンケート検証結果について ②「相山女学園大学・大学院F D活動報告書(2020年度版)」原稿の 締切確認について 2 議題 (1) 2020年度大学院F D活動計画検証に関する件 (2) その他

1. 実施概要

・実施期間

前期：2020年 7月20日（月）～2020年 8月10日（月）

後期：2021年 1月6日（水）～2021年 1月22日（金）

・実施方法：Google フォームにより Webで実施

2. 実施状況

【前期】

研究科	前期在学数	回答数	回答率
生活科学研究科	14	8	57.1 %
人間関係学研究科	21	8	38.1 %
現代マネジメント研究科	3	2	66.7 %
教育学研究科	3	1	33.3 %
計	41	19	46.3 %

【後期】

研究科	対象者数	回答数	回答率
生活科学研究科	15	8	53.3 %
人間関係学研究科	19	2	10.5 %
現代マネジメント研究科	3	2	66.7 %
教育学研究科	3	0	0 %
計	40	12	30.0 %

2020年度 大学院授業アンケート結果について（生活科学研究科）

本年度も生活科学研究科に在籍する大学院生を対象に、前期・後期の2回授業アンケートを実施した。方法は、前期が教務課から学生へアンケート用紙を郵送する記述回答方式（提出は教務課への返信または提出）、後期がGoogleフォームでwebにより実施した。アンケート回収率は、以下の表に示す。

	前期	後期
人間生活科学専攻（博士後期課程）	100%(4/4)	16.7%(1/6)
食品栄養科学専攻（修士課程）	66.7%(2/3)	100%(3/3)
生活環境学専攻（修士課程）	28.6%(2/7)	57.1%(4/7)

なお、アンケートの設問内容は、いずれも以下の4項目である。

設問1) 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など

設問2) 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点

設問3) 教室設備、研究設備、授業環境などについて気づいた点

設問4) その他、気づいた点

これらの得られたアンケート結果について、確認と検証を行った。第一に、回収率は前回と比べやや上昇したものの、今回は前後期で実施方法が異なること、現在の状況などを踏まえて、今後回答率を向上させる方策を検討する必要がある。また、全学でも問題となったが、この周知徹底には指導教員に委ねており、実施する時期も論文提出時期と重複している。これらの点については、改善の余地があると考えられる。

アンケートの項目では、授業科目に関わる設問項目1) 2) について全員から良好な回答を得られた。しかし、設備・環境面については、大きく分けて①機器の老朽化に伴う不具合、②教室設備に関する要望の2点が多くみられた。これらについては、例年と同様であり、以下の改善策が考えられる。

①研究機材について

研究活動に欠かせない実験装置やコンピュータなどの研究機器は、いずれの専攻においても大学院生にとって研究遂行のため必須であり、その整備は極めて重要である。近年、本研究科に所属する大学院生が少数であり、研究機器の更新が遅れているのが現状である。

これまでのアンケートを含めて、在籍期間中研究機器に不満を感じている大学院生がそのまま修了している可能性がある。今後は、新規事業要求の機会などを利用し、積極的に研究機器の更新を申請し、大学院生の研究活動の支障とならないよう考慮していく。

②教室設備について

各専攻の特性により一概に言えないが、その特性に応じた教室設備を整えることが大学院生の積極的な研究活動を促すことに繋がり、検討項目として加えていくことが必要となる。前述と同様、本研究科に所属大学院生が少数であることから検討することが遅れている一面もあるが、今後改善すべき点を検討していく。

また、その他の項目では、学会発表の機会に関すること（大学活性化経費）や奨学金、通学方法などの要望が見られた。これらについても含めて、今後大学院生の学修や研究が円滑に遂行できるよう、研究科内で積極的な提案を受けながら様々な意見の集約し、現状の改善を図っていきたい。

2020 年度 大学院授業アンケート結果について(人間関係学研究科)

2020年度の前期・後期それぞれに実施された大学院授業アンケート結果の確認・検証は、本研究科ではカリキュラム体系の異なる3つの領域ごとにおこなわれている。今年度は、2領域(臨床心理学領域・教育学領域)に在学生がおり、いずれも回答を得たことから、領域ごとの確認・検証結果を報告し、最後に研究科の視点で総括する。

【臨床心理学領域】

前期開講科目については、「心理療法特講Ⅰ(心理支援に関する理論と実践)」「産業・組織心理学特講(産業・労働分野に関する理論と支援の展開)」「臨床心理査定演習Ⅰ」「臨床心理査定演習Ⅱ」「事例研究」に対して良好な評価が得られた。

実践的な観点からは、「臨床心理学基礎実習Ⅰ・Ⅱ」などとして開講しているケースカンファレンスに対して良好な評価が複数あり、様々な角度から教員の意見を聞いて自分自身の気づかなかった視点に気づくことができた、心理臨床家としてのあり方やクライアントとの関わり方について深く考えることができたという意見が見られた。スーパーヴィジョンにおいてはクライアントとの関わり方について検討でき、学外実習でも新たな学びがあったなど、心理実践への教員のサポートについての評価が高かった。

また、特別研究についても、熱心に指導してもらい研究に向き合う姿勢が変わったという意見が見られた。

後期開講科目については、時期的な問題もあり、1名しか回答が得られなかったが、「精神医学特講(保健医療分野に関する理論と支援の展開)」に対して良好な評価が得られた。

改善すべき点については、「(特に)なし」という回答がすべてであったので、授業に対する満足度は高いと考えられる。

【教育学領域】

教育学領域の院生による回答が前期・後期各1件で、かつ意見が少なかったため、領域のFDとしては、回答に対する意見交換ではなく、2020年度の教員による授業の振り返りも含めて検討を行った。本項目においては、授業アンケートの質問内容に関わる点について、教員からあがった意見と課題を記しておく。

2020年度において、前期はオンライン、後期ではオンライン・対面で授業が行われたが、オンラインでの授業について、対面と変わらなかった、また少人数のためディスカッションがスムーズにできたとの意見があった一方で、オンデマンドの形式ではいきいきとした授業の実施が難しかった、また対面のほうが議論が深まるといった課題があげられた。さらに授業関係に関連する意見として、朝日新聞のデータベースを使用する授業において、ログイン人数が1名に制限されているため、授業内のやり繰りに苦労したとの課題も示された。今年度のアンケートには院生からの具体的な意見や要望はなかったが、オンライン授業や授業におけるデータベースの活用に関する課題が浮き彫りになった。今後はこれらを検証しながら、対応を具体的に考えていきたい。

【研究科としての総括】

前期アンケートの回収率は、臨床心理学領域は43.8%(7/16)、教育学領域は20%(1/5)であった。後期アンケートの回収率は、臨床心理学領域は6.25%(1/16)、教育学領域は20%(1/5)であった。改善点や要望について特に記されていなかったことから、少なくとも回答者については、コロナ禍においても授業に対する満足度が高かったと思われる。しかし、特に後期の回答者数の少なさは、調査の妥当性や信頼性が問われる。質問内容やアンケート実施時期など、検討する必要があると考える。

大学院教育においてオンラインの仕組みをどのように利用するのか、またデータベースをはじめ、インターネットの利用環境をどのように整えるのか、アンケート回答だけでは得られない情報(意見)などもふまえて、あらためて検討しなければならない。

2020年度 大学院授業アンケート結果について（現代マネジメント研究科）

設問 1 「授業科目及び研究指導科目で興味深かった点・有益であった点」について

様々な論文を読むなど専門科目を深く掘り下げた授業や、学生の要望に沿った授業内容、質問に対する丁寧な解説などが高く評価された。また、修士論文の執筆にあたり、論文の表現指導や構成、参考文献の提示など、不足している部分の指摘が有益であったとの回答が寄せられた。

設問「授業科目及び研究指導科目の改善すべき点」「授業環境」「その他意見」について

これらの項目についての回答はなかった。

総評

本研究科には3名（修士課程2年2名、1年1名）が在籍しているが、今年度は前期・後期ともに2名から回答があった。調査方法は、前期は従来どおり郵送で、後期はGoogleフォームにより実施したが、回答率は変わらなかった。授業アンケートの回答率や内容の向上に向け、回答期間の変更や延長の検討が必要だと思われる。

5 研究科FD活動報告

- 5－1 生活科学研究科
- 5－2 人間関係学研究科
- 5－3 現代マネジメント研究科
- 5－4 教育学研究科

生活科学研究科は、中部地方初の生活科学系大学院を基礎として、衣・食・住に関わる学問の発展に寄与できる人材育成を目標としており、食品栄養科学専攻と生活環境学専攻の2専攻によって構成され、より高度な研究者養成を目指し博士後期課程（人間生活科学専攻）を有している。本研究科のFD委員会は、平成24年に発足され以来、大学院の授業内容や教育方法を改善し向上させるための活動を行っており、令和2年度は以下の活動を行った。

1. 研究成果発表会の実施

本年度の修士課程の両専攻および博士後期課程における中間発表会、修士論文発表会および博士論文発表会はオンラインでの開催となった。個別の指導教員のみならず、他の教員からも様々な意見や助言をもらうことにより、大学院生の研究活動がさらに向上すると思われ、とても有益な会となった。

(1) 大学院修士中間発表会 2020年9月1日（火）

（食品栄養学専攻）

- ・加藤志都「若年女性における日中の眠気・睡眠の質と生活習慣との関係について」

（生活環境学専攻）

- ・川元優果「薄鋼板を加えた面格子壁の耐震性能評価に関する研究」
- ・齋藤あずさ「地域再興計画:住民意識の把握と空き家活用の提案—長野県木祖村旧藪原宿を対象として—」

(2) 大学院博士中間発表会 2020年9月1日（火）

- ・加藤千穂「若年女性の日常行動が姿勢に及ぼす影響」
- ・今井素恵「衣服下微小空隙の熱伝達」

(3) 大学院修士論文発表会 2021年2月16日（火）

（食品栄養学専攻）

- ・加藤志都「若年女性における日中の眠気・睡眠の質と生活習慣との関係について」

（生活環境学専攻）

- ・川元優果「薄鋼板を加えた面格子壁の耐震性能評価に関する研究」
- ・齋藤あずさ「地域再興計画:住民意識の把握と空き家活用の提案—長野県木祖村旧藪原宿を対象として—」

2. 授業アンケートの実施

本年度も生活科学研究科に在籍する大学院生を対象に、前期・後期の2回授業アンケートを実施した。方法は、前期が教務課から学生へアンケート用紙を郵送する記述回答方式（提出は教務課への返信または提出）、後期がGoogleフォームでwebにより実施した。アンケート回収率は、以下の表に示す。

	前期	後期
人間生活科学専攻（博士後期課程）	100%(4/4)	16.7%(1/6)
食品栄養科学専攻（修士課程）	66.7%(2/3)	100%(3/3)
生活環境学専攻（修士課程）	28.6%(2/7)	57.1%(4/7)

なお、アンケートの設問内容は、いずれも以下の 4 項目である。

設問 1) 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など

設問 2) 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点

設問 3) 教室設備、研究設備、授業環境などについて気づいた点

設問 4) その他、気づいた点

これらの得られたアンケート結果について、確認と検証を行った。第一に、回収率は前回と比べやや上昇したものの、今回は前後期で実施方法が異なること、現在の状況などを踏まえて、今後回答率を向上させる方策を検討する必要がある。また、全学でも問題となったが、この周知徹底には指導教員に委ねており、実施する時期も論文提出時期と重複している。これらの点については、改善の余地があると考えられる。

アンケートの項目では、授業科目に関わる設問項目 1) 2) について全員から良好な回答を得られた。しかし、設備・環境面については、大きく分けて①機器の老朽化に伴う不具合、②教室設備に関する要望の 2 点が多くみられた。これらについては、例年と同様であり、以下の改善策が考えられる。

①研究機材について

研究活動に欠かせない実験装置やコンピュータなどの研究機器は、いずれの専攻においても大学院生にとって研究遂行のため必須であり、その整備は極めて重要である。近年、本研究科に所属する大学院生が少数であり、研究機器の更新が遅れているのが現状である。

これまでのアンケートを含めて、在籍期間中研究機器に不満を感じている大学院生がそのまま修了している可能性がある。今後は、新規事業要求の機会などを利用し、積極的に研究機器の更新を申請し、大学院生の研究活動の支障とならないよう考慮していく。

②教室設備について

各専攻の特性により一概に言えないが、その特性に応じた教室設備を整えることが大学院生の積極的な研究活動を促すことに繋がり、検討項目として加えていくことが必要となる。前述と同様、本研究科に所属大学院生が少数であることから検討することが遅れている一面もあるが、今後改善すべき点を検討していく。

また、その他の項目では、学会発表の機会に関すること（大学活性化経費）や奨学金、通学方法などの要望が見られた。これらについても含めて、今後大学院生の学修や研究が円滑に遂行できるよう、研究科内で積極的な提案を受けながら様々な意見の集約し、現状の改善を図っていきたい。

人間関係学研究科の今年度のFD活動について領域ごとに報告するとともに、新領域設置に向けたワーキンググループの活動もFD活動の一部として位置付けて報告する。

1. 臨床心理学領域

(1) 研究教育活動

①心理学実験のTA（前後期）

学部2年生を対象とした心理学実験のTAとして、大学院生10名(M1、M2)が1年間（うち1名は半期間）にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的支持、統計解析、レポート作成の相談にあたった。

②自主課題発表会(2021年1月7日、14日)

心理学実験実習の成果を発表する自主課題発表会において、大学院生(M1、M2)9名が会場の司会(座長)として運営に携わった。

③修士論文中間発表会(2020年7月31日)

2020年7月31日には、2021年1月に修士論文を提出する予定であった9名の大学院生(M2)が3グループに分かれてそれぞれ発表した。これは毎年実施し、原則として全教員、大学院生(M1、2)が参加している。大学院生は指導教員による指導を超えて、他の教員や大学院生からさまざまな助言指導を得ることにより、より広い観点から研究にアプローチする力が涵養される。また、2021年2月26日には、2021年7月に修士論文を提出する予定である1名の大学院生(M2)が発表を行った。

④臨床心理相談室紀要「梶山臨床心理研究」の発行

教員4名が研究論文を執筆し、大学院生(M2)10名が事例研究を執筆した(2021年3月10日発行)。大学院生の事例研究については、原則として外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。

⑤大学見学会

院生4名が分担して、3回の学科展示企画の紹介と、心理検査体験の補佐を行った。

(2) 臨床実践

①面接の個別指導

臨床心理士資格試験の一次試験に合格した全員に対して、教員が分担して面接に対する個別指導を行った。

②公認心理師試験・臨床心理士資格試験対策講座

2021年2月19日から3月26日まで計6回、公認心理師試験・臨床心理士資格試験対策講座を梶山女学園大学人間関係学部へ外部講師を招いて開催した。参加者はM1が1名、M2が8名の合計9名であった。

③臨床心理相談室ケース報告会(2021年3月6日)

臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員(非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生)が一同に会し、年1回のスタッフ会議を行った。大学院生・修了生には、組織における臨床相談上の実践的な課題などを検討する好機となり、非常勤相談員には相談室運営上の課題などの共有の場となった。

④日進市教育委員会との連携事業

- ・発達障害保護者相談会：日進市内の小中学生の保護者を対象として子どもの発達障害に関する相談会を開催した（2020年9月10・11・14・15日の4日間）。教員9名が保護者36名の相談を受けた。
- ・小中学校への巡回指導：教員が市内の13小中学校に、前後期を通じ原則2回出向いて巡回指導を行った（2020年6月～2021年3月）。

⑤臨床心理相談室員向け講演会（2021年3月6日）

本学修了生で名古屋市子ども応援委員会総合援助職の篠田真希氏を講師に迎え、「名古屋版、チーム学校とスクールカウンセラーの活動」という内容で講演していただき、実習員が中心に参加した。大学院生・修了生には、教育領域における実践を学ぶ好機となった。

2. 教育学領域

教育学領域では、例年前期と後期それぞれ1回の修士論文の中間報告会を行ってきた。これは院生が領域を担当する全教員に対して修士論文作成のための研究の進捗状況を報告し、さまざまな助言、指導を受ける場として設定されている。2020年度の前期については、コロナへの対応のため、メールで報告資料を送ってもらった上で、それぞれの報告に対する教員のコメントを集約し、メールで返送するという形式で実施した（7月）。後期は11月14日（土）に対面で開催された。

また、領域担当教員による授業改善のための意見交換会を授業アンケートの検討も兼ねて3月9日（火）に行った。教育学領域の授業アンケートに関わる検討の項目にて、オンライン授業の課題について述べたが、意見交換の中ではそのメリットも指摘された。とくに修士論文の執筆や調査の指導の際に、短い時間での指導を頻繁に実施できる点がメリットとしてあげられた。コロナへの対応の中でオンラインのツールを活用せざるを得ない状況であったが、オンライン授業を実施する過程で得られたノウハウは、今後の通常の指導においてもいかせると思われる。

3. 新領域設置に向けた活動

2022年度より、社会学領域と教育学領域を廃止し、新たに人間共生領域を立ち上げる。2020年度は、その新領域の教育プログラムおよび運営システムについて、ワーキンググループ（新領域担当教員）にて毎月検討をおこなった。大学の理念・目標の確認、教育制度の理解、カリキュラムの構成、履修指導の仕組み、当該領域の社会的役割、学内組織のあり方など、文部科学省が示すFDの定義や内容に関わる多くのことについて話し合った。今後も、学識を深め、学問の統合の探究をすすめていく。

本研究科のFD活動として、大学院教育における剽窃問題の共有と防止ソフトの活用についての勉強会ならびに大学院アンケート調査結果の報告会の2つを報告する。

1. 大学院教育における剽窃問題の共有と防止ソフトの活用についての勉強会

題目：大学院教育における剽窃問題と防止ソフトの活用

開催日時：2020年12月8日 現代マネジメント研究科教授会

場所：現代マネジメント学部棟206教室

報告者：①野崎祐子「論文と剽窃問題：コピペルナーの活用」

②柴由花・苗 馨允「コピペルナーの活用」

報告①では、研究活動における不正行為の定義を確認し、これまでの事例を紹介した。その上で先行研究をサーベイし、剽窃の発見にコストがかかるため、未然防止が難しいこと、現大学生がデジタルネイティブであるため、従来の情報モラル教育では解決が困難であることを示した。報告②では、こうした背景を踏まえ、本研究科で導入し剽窃防止ソフト「コピペルナー」の設置場所や具体的な使用方法についての説明があった。全体のディスカッションでは、コピペルナーの意義や今後の活用方法についての活発な意見が交換された。

2. 2020年度大学院授業アンケート結果の報告と検討

題目：2020年度大学院授業アンケート結果について

開催日時：2021年3月9日 現代マネジメント研究科教授会

場所：現代マネジメント学部棟206教室

報告者：野崎祐子

2.1 設問1「授業科目及び研究指導科目で興味深かった点・有益であった点」

様々な論文を読むなど専門科目を深く掘り下げた授業や、学生の要望に沿った授業内容、質問に対する丁寧な解説などが高く評価された。また、修士論文の執筆にあたり、論文の表現指導や構成、参考文献の提示など、不足している部分の指摘が有益であったとの回答が寄せられた。

2.2 設問「授業科目及び研究指導科目の改善すべき点」「授業環境」「その他意見」について

これらの項目についての回答はなかった。

2.3 総評

本研究科には3名（修士課程2年2名、1年1名）が在籍しているが、今年度は前期・後期ともに2名から回答があった。調査方法は、前期は従来どおり郵送で、後期はGoogleフォームにより実施したが、回答率は変わらなかった。授業アンケートの回答率や内容の向上に向け、回答期間の変更や延長の検討が必要だと思われる。

1. FD研修会(教育学研究と教育学部共通のFD研修会) 研究倫理教育

テーマ：研究と論文のマナー講座

日時 2020年9月24日(木)と9月30日(水) 12:30~13:10

いずれかの1回参加

講師 山田真紀教授

方法 Zoom配信による遠隔同時双方向

教育学研究科の大学院生及び教育学部3年生・4年生を対象とした研究倫理教育を、Zoomを利用した遠隔同時配信で行い、専任教員へのFD研修とした。

2. 修士論文(中間発表)

日時 2020年10月3日(土) 10:00~11:40

場所 教育学部棟310教室

方法 対面とGoogle ClassroomのMeetによる遠隔同時配信

発表 修士2年2名、1年1名

参加した教員による活発な意見が出された。

3. 修士論文発表会

日時 2021年1月30日(土) 11:00~11:30

場所 教育学部棟C310(対面とGoogle Classroom Meetによる同時配信)

方法 対面とGoogle ClassroomのMeetによる遠隔同時配信

発表 修士2年1名

参加した教員による活発な意見が出された。

6 FD委員会名簿

2020年度全学FD委員会委員

所 属	職位	氏名	選出区分
学長補佐	教授	長澤 唯史	学長補佐
生活科学部	講師	三田 有紀子	学部FD委員
国際コミュニケーション学部	教授	笠原 正秀	学部FD委員
人間関係学部	教授	吉田 あけみ	学部FD委員
文化情報学部	教授	谷口 俊治	学部FD委員
現代マネジメント学部	准教授	野崎 祐子	学部FD委員
教育学部	教授	山田 真紀	学部FD委員
看護学部	教授	小林 純子	学部FD委員
学長指名	准教授	見田 隆鑑	学長指名

2020年度大学院FD委員会委員

所 属	職位	氏名	選出区分
学長補佐	教授	長澤 唯史	学長補佐
生活科学研究科	講師	三田 有紀子	研究科FD委員
人間関係学研究科	教授	谷口 功	研究科FD委員
現代マネジメント研究科	准教授	野崎 祐子	研究科FD委員
教育学研究科	教授	宮川 充司	研究科FD委員

相山女学園大学・大学院FD活動報告書（2020年度）

相山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント
第 8 号（通巻 第21号）

2021（令和 3）年 7 月発行

編 集	相山女学園大学大学院FD委員会・全学FD委員会 （2020年度・2021年度委員長 長 澤 唯 史）
発 行	相山女学園大学 〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3 TEL 〈052〉 781-1186（代）